敵前上陸と日本精神

39333
H48
2

陸軍中將 佐藤清勝閣下序
大本營陸軍報導部 陸軍少佐 平櫛孝序

林直人著

0056803000

0056803-000

393.3-H48-2ウ

敵前上陸と日本精神

林直人・著

田中誠光堂

昭和17

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

393.3
H48
2

陸軍中將 佐藤清勝閣下序
大本營報道部陸軍少佐 平櫛孝序
林直人著

敵前上陸と日本精神

東京 田中誠光堂 發行

E 932 73

序

今や世界は一大轉換期にある、嘗て日沒する所なしと唱へたる殖民帝國英吉利も將さに崩壞せんとし、嘗て唯物主義を金科玉條なりと唱へたる共產國蘇聯も將さに動搖しつゝあせんとし、嘗て物自給せざるはなしと唱へたる黃金國亞米利加も將さに傾倒り、而して嘗て國際規約の羈絆に繫がれたる日獨伊三國は、轡を並べて勁敵英米露と戰ひ、太平太西の兩洋に跨り、亞歐阿の三大陸を超へて進み、舊勢力を打破し倒壞して、新世界を建設しつゝあることは、人類史上未だ嘗て見ざる空前絕後の壯觀でありと偉觀である。

亞細亞の盟主日本が、日露戰爭以來歐米の殖民地たりし亞細亞の開放を叫び、亞細亞人の亞細亞人たらしめんとして努力したる新秩序建設の事業は、英米の障礙壓迫により却つて反撥し、日本は獨伊兩國と共に英米に向つて健鬪し、三軍の動く所三千里の海洋を超へて、既に呂宋、馬來、緬甸、及び蘭印諸島を戡定し、印度及び濠州に迫らんとしつゝある、その戰場の廣濶雄大なる、その戰果の神速果敢なる、千古未だ嘗て見ざる所、歐米人が舌を捲いて驚嘆畏怖する所のものである。而して是等の作戰は主として海洋上の島嶼及び半島に於て行はるるが故に、至る處陸海兩軍の協同による上陸作戰によつて開始せられつつある。

上陸作戰は對敵戰鬪たると同時に對水戰鬪である、歐米軍の將兵が靴踵をだに潤すを欲せず足蹠をだに裸にするを欲せず、船側を港岸に接着し、衣裳を浸すを欲せざる淑女の如き上陸をなさんと欲するに反し、海國日本軍の將兵が深さ肩胸に達する海中に飛入し、狂瀾怒濤を物ともせず、海礁岸巖を物ともせず、陸地に向ひ跳躍し、岸上の敵に突進するもの、是れ卽ち對敵戰鬪と對水戰鬪とを同時に行ふものであり、上陸作戰の妙機である。

友人林君、大東亞戰爭の開始せらるるや、我が軍の太平洋に於ける至る處の上陸作戰に着目し、其の雄健の筆を揮ふて、其の活躍の實狀を詳述し、以て海國日本男兒の本領を叙說し虹霓の氣を吐いて安逸の國民を醒覺せんと欲する、其の志や壯であり其の著や快である、稿成り來つて予に序を求む、予其の志を尙とし其の著を高とし、大東亞戰爭の爲め國民意氣の昂揚に資すること多大なるを信ずるものである、蓋し筆硯の力は一見微にして弱なるが如きも、實は千萬人をして感奮興起せしめ、懦夫をして感激躍動せしむる偉大なる力を有するものあるが故に、世界の一大變轉期に於ける皇國日本の興隆に寄與すること大なるを思ひ、敢て是の書の閱讀を江湖の諸君子に推奬するものである。

昭和十七年五月

陸軍中將　佐藤清勝　誌

序

我が帝國が、大東亞に聖戰を進むるに當り、先づ以つて敢行せねばならぬ事は、敵前上陸である。

敵前上陸は皇軍の鍾愛無二の戰術であり、而かも、日本精神の直接なる發露である。西歐にも敵前上陸はあるが、それは失敗の代名詞である。

西歐の敵前上陸は、單に上陸地帶のみを目標とするに反し、皇軍の敵前上陸は、先づ水を征して後、敵前上陸を敢行するのである。

其處に大なる差がある。海國日本が先づ海を征し、後敵を征する必然性は當然天下無類の敵前上陸として現はれねばならぬ。

而してこの敵前上陸は、日本精神の代名詞である。君國の爲一身を無にしてこそ、捨身の戰法は取り得るのである。

敢て江湖に薦む。

大本營報道部
陸軍少佐　平櫛　孝

自序

輝やかしき皇軍の戰果は、先づ敵前上陸より甫まる。空、海、陸の立體戰は、敵前上陸の定法であるが、我が皇軍の敵前上陸は、更に無形の大和魂が、其の基幹をなしてゐる。

本書は、敵前上陸の實際を記述すると共に、日本精神の高揚に資すべく編纂したものである。

其の理論と、其の實際とは、共に相俟つて皇軍の華となり、大和魂の結晶となるのである。

而して國策に添ふべく我が國民が、南方發展に邁進すべく特に南方事情を添へておいた。

參考ともなれば幸甚である。

昭和十七年五月

編者識

敵前上陸と日本精神　目次

第一章　總說……一
第一節　敵前上陸の大意義……一
第二節　敵前上陸と日本軍……五
第三節　敵前上陸と奇襲的効果……八
第四節　敵前上陸と戰爭の意氣……一一
第五節　敵前上陸と神風……一五
第六節　大東亞戰爭の特質と敵前上陸……一九
第七節　外人の見た敵前上陸と日本精神……二二
第八節　敵前上陸と絕對和……二七
第九節　敵前上陸と大勇……三一

第十節　敵前上陸と人生問題……三五
第十一節　敵前上陸と兵法……三七
第十二節　敵前上陸と東西兵聖……四五
第二章　敵前上陸と一般知識……五一
第一節　敵前上陸の一般……五一
第二節　護送艦艇と敵前上陸……五七
第三節　輸送船團と航空掩護……五九
第四節　敵前上陸と輸送船……六一
第五節　敵前上陸と編成……六三
第六節　敵前上陸と輸送船員……六五
第七節　敵前上陸と蔭の殊勳者……六七
第八節　敵前上陸と軍馬……六九

第三章　敵前上陸の實際……七三
第一節　概　說……七三
第二節　支那事變敵前上陸……七七
1　上海敵前上陸……七七
2　杭州灣敵前上陸……八一
3　バイアス灣敵前上陸……八五
第三節　大東亞戰爭と敵前上陸……九一
1　香港の敵前上陸……九一
2　馬來コタバル敵前上陸……九四
3　フイリツピン敵前上陸＝ラモン灣＝……一〇三
4　リンガエン敵前上陸……一〇九
5　アパリの敵前上陸……一一三

6 グランデ島要塞上陸……一二五
7 ボルネオ敵前上陸……一二八
‖ブルネイ方面‖……一二八
‖クチン敵前上陸‖……一三〇
8 ウエーキ島敵前上陸……一三五
9 ポンチヤナツク敵前上陸……一四五
10 カビエング敵前上陸……一四九
11 シンガポール敵前上陸……一五一
第四節 敵前上陸美談……一五五
1 輸送船の奮戰……一五五
2 掃海艇の犧牲……一六〇
3 コタバル敵前上陸の華……一六一
4 運動選手一つは咲き一つは散る……一六四

5 シンガポールと雪洞の力……一六八
第四章 敵前上陸と南洋地方……一七一
1 馬來半島……一七一
2 フイリツピンルソン島風景……一七四
3 フイリツピンミンダナオ島……一七七
4 英領ボルネオ……一八一
5 セレベス島メナド港……一八四
6 タラカン島地方……一八五
7 ボルネオ島バリツクパパン……一八七
8 濠洲委任統治領地方……一九〇
9 ニユーギニヤ島地方……一九三
10 ハルマヘラ群島地方……一九六

11 アンボン島地方……一九八
12 バマンカット……一九九
13 ジャバ島敵前上陸……二〇一
第五章 敵前上陸と將來の結論……二〇三
第一節 米本土敵前上陸……二〇三
第二節 米本土敵前上陸の方法と戰果……二〇六
第三節 日本本土と敵前上陸……二一〇
第四節 共榮圈内の敵前上陸……二一三
第五節 敵前上陸の結論……二一四
1 形から見たるもの……二一四
2 精神力より見たもの……二一六

敵前上陸と日本精神

第一章 總說

第一節 敵前上陸の大意義

敵前上陸は、兵法にして兵法に非ずと、一兵聖は喝破した。敵前上陸は、用兵の一方法なれど、立派なる兵法である、されど、古來の兵法七書に捕はれたり、西歐流の戰爭觀に縛られる如き、淺薄なる意義のものではない——と言ふ意味である。

凡そ、兵法七書や西歐兵聖の說く處は、兵を動かし、兵を用ふる形と、其の力とを根元としたのである。之れは當然すぎる程當然なる理である。されど奇襲敵前上陸に於ては更に

「理外の理」

と言ふ、不審なる力を捲き起すのである。通例の理法では說き得ぬ力である。換言すれば

「人爲以上の力」

と言ふものが手傳ふ。之れは兵法七書にも、西歐の兵書にもあらう筈がない。

「人爲以上の力」

とは何か、曰く『神風である』、神風は風のみを言ふのではない。眼に見えざる力。耳に聞えざる力――の總稱である。例へば、奇襲上陸に當つて

一、不思議なる天候の變化

二、敵陣の異變

三、敵國作戰の齟齬

四、敵自傷の奇蹟

五、自然に拓く突擊路

等々である。

之れ等は豫め期する事は出來ない。然も日本軍の敵前上陸には、必ず之れ等何れかゞ伴ふ。故に兵法に依りてのみ論ずる事も、用兵學に依つてのみ究むる事は出來ない。

「敵前上陸は日本軍の專有だ」

と歐米の將兵が嘆賞するのも無理はない。

然らば何故に、日本軍の敵前上陸には、斯る奇蹟が伴ふか。曰く、肇國以來三千年、正義の爲には、如何なる物おも貫かねが止まぬ、日本魂の偉力である。この日本魂は、支那や西歐に見るが如き、一時の亢奮に依つて生ずる、勇氣と稱するが如きものではない。

「肇國の大精神」

と云ふ大本體より生れ、而かも　此の大本體こそは、何物おも、動かさねば止まぬ。宇宙の絕對力を有する莊嚴なるものであるからである。

敵前上陸は、日本軍の華であり、日本魂の結晶である。今次大東亞戰爭に於て、眞に日本精

神を發揮するの期に當り、日本精神の華である、

「敵前上陸の大戰」

が展開さるゝは、當然過ぎる程當然である。

第二節　敵前上陸と日本軍

日本軍は突擊第一の軍隊である。日本軍に守備は第二である。日本國が大陸に驀進する爲には、突擊又突擊でなくてはならぬ、東亞大共榮圈を獲得する爲には、第一突擊、第二建設である。

この大突擊は、全部敵前上陸と言つても過言ではない。

孫子の兵書の中にも、クラウゼウキツの兵法の中にも、特に敵前上陸と言ふ敎へはない。往時は、遠く海外に渡つて、奮戰する事も尠く第一敵前上陸と言ふが如き、勇敢なる策戰は、容易には考へられなかつた。

敵前上陸は、言ひ換へれば、捨身の戰法である。萬一失敗すれば、全滅である。第一次歐洲戰亂に於て、英軍が、ガリポリ半島に敵前上陸を試み、慘々な目にあつた事は、世人周知の事實である。

敵前上陸は單に、　捨身とは言へ、眞底から腹が出來てゐなければ、所謂人力を超越したる、偉力が出ない。卽ち第六意識であり「神の力」であり「神風」である力が出ない。

之れは外國では到底望み得ない「力」である。ガリポリ半島、上陸策戰に失敗したる英軍は如何にして、其の目的を達せんかと種々研究した結果、

「敵前上陸は、日本に學べ」

と言ふ事になつた。而し他の策戰は、學ぶ事が出來ても、敵前上陸は、同じく戰術であつても、眼に見えざる力、耳に聞えざる力が根底である。

「天皇陛下萬歲」

を叫んで歡然と死ぬ日本魂が、根本である以上、形を學んでも、其の眞底を摑む事は出來ない。

「日本の敵前上陸は天下一品」

と、折紙をつけたのも無理はない。彼等には、其の形の上の敵前上陸を見てさへ、驚嘆するのであるから、眞に、敵前上陸に向ふ、皇軍勇士の雄大深遠なる魂膽の一片を、嘗めさせたれば、どんなに驚く事であらう。

敵前上陸こそ、日本軍の眞價を、ハツキリ海外に示すものである。今次大東亞戰爭によつて一層如實に裏書きされつゝあるは、實に歡喜に堪えざる處である。

第三節　敵前上陸と奇襲的効果

敵前上陸は、奇襲を必要とする。卽ち敵の不意を襲ひ、味方の損害を尠く、且つより多くの戰果を得るのが目的である。

然かも之れ以外、大切なるねらひは、敵の心膽を寒からしむる事である。

戰ひに「氣合」が肝要なるは、申す迄もない、敵前上陸の、奇襲を生命とするは、大なる「氣合」を浴せ、敵を怯ませる效果をねらふからである。

綜合目的である

「兵は正を以て合し、奇を以つて勝つ」

と孫子が言つた。卽ち戰ひは奇より出でゝ愈々奇、千變萬化に處し、機略縱横、奇手百出、臨機應變のみが勝利を占めるのである。

奇襲敵前上陸は、其の最も尤なるものである、而して、

「奇に出て、正に合す」

でなくてはならぬ。奇襲敵前上陸は、奇にのみ走つてはならない。正に合する豫測がなくてはならない。卽ち

「必ず勝つ」

と言ふ確算がなくては斷行出來ない。今回の歐洲大戰に於て、獨逸が、容易に英本土敵前上陸を斷行しないのも、玆所の大事を取つてゐるからである。

第二次上海戰に於て、あれ程無理なる、敵前上陸を、斷行した日本軍は、

「必ず勝つ」

「如何なる犧牲を拂ふも、必ず敵前上陸せざるべからず」

と言ふ、大眞念の下に、敵前上陸を强行したのである。故に犧特者は出ても、

「奇に出でざるより正し」

である。若し日本軍が、敵前上陸が困難にして、犧牲を惜しみ、迂なる方法を取つてゐたら

後節に於て述ぶるが如く、

「日本租界奪取」

の蔣介石の宣言通りになつたかも知れない、

「必ず上陸する」

と言ふ、大信念こそ、敵前上陸の、根本義である。この大信念あればこそ、大意識も生れ前節に述べたる―「神風」―も吹く事となるのである。

第四節　敵前上陸と戰爭の意氣

＝裏面の上海敵前上陸＝

「人生意氣に感ず」

と言ふ言葉がある。戰ひも人生である以上、其の眞理は同じである。

「戰鬪も意氣に感ず」

でなけらねばならぬ。日支事變の劈頭、上海作戰に於て、日本の陸戰隊は、寡兵よく剛を制し、怒濤の如く押し寄せる支那軍を、漸く抑へてゐた。其の苦戰は到底普通の兵法では役立たぬ、强ひて言へば、

「善く戰ふ者は、九地の下に藏れ、故に能く自ら保つて全勝するなり」

であるが、敵は雲霞の如く、新手を以つてひし〳〵と襲擊する。蔣介石にすれば、

「日本大增援軍來る」

の前に陷落せしめねばならぬ。卽ち

「敵衆、整にして將に來らんとす、之を待つ如何、曰く先づ愛する所を奪はゞ卽ち聽かん、兵の情は速かなるを主とす、敵の及ばざるに乘じ、慮らざるの道に由り、其の戒めざる所を攻むるなり」

日本軍來援の眼前に於て、而かも其の日本軍が爾後の作戰上、唯一無二の基根にして、鍾愛重要なる陸戰隊を、先づ以つて奪はねばならぬ。

其の奪ふや、兵の情、迅速果敢、日本軍來援末ば及ばざるに乘じ、一擧粉碎すべきは當然であつた。

この目的の爲には、如何なる犧牲も、如何なる、冒險も、敢てなさねばならなかつた。然るに蔣介石は、果して其れを決行したであらうか。

當時蔣介石は、江南の地に數十萬の大軍を集結し、戰力は充分整つてゐる。其れにも係らず攻勢には出たが、猛然奮ひ立つて、遮二無二襲擊する事を得しなかつた。

「こんな事では戰ひは、意氣に感じない」

のである。

兎角するうち、迅速、日本軍は、羅店鎭、吳淞鎭方面に特意の敵前上陸を敢行したのであつた。

日本軍は、如何なる犧牲を拂ふも、

「敵前上陸決行」

を正眼に構へた。これが爲には如何なる冒險も敢てした。

上陸した日本軍は、最初は、トーチカ、クリーク、江岸一面に並べた機關銃の爲め、手酷しい損傷を受けたが、勇猛果敢なる日本軍は、遂に一角を奪取し、日一日と據點を確保した。

この時も遲くはない、蔣介石は、——日本陸戰隊を陷落し得なかつた——泣言を繰つてゐないで渾身の勇を皷して、猛烈半渡逆擊の擧に出づべきであつた。

「半ば濟らしめて、之を擊てば利あり」

と、二千年の昔、孫子は敎へてゐる。これは古今東西の名將、等しく裏書きしてゐる處である、今日と雖も微動だもせぬ大眞理である。

其れ位の事は、蔣介石と雖知らぬ筈はない。然らば、何故彼れになし得なかつたか、他なし彼れは、

「戰ひに對する意氣」

がなかつたからである。日本軍を撃滅すると云ふ、眞の意氣がなかつたからである。唯、日本軍を消耗させ、他力本願に依つて自然消滅させる事のみ考へてゐたからである。

第五節　敵前上陸と『神風』

獨り敵前上陸ばかりではない、曩きに日支事變の劈頭一擧、渡洋爆撃を敢行、支那空軍を撃滅した其の夜は、暴風雨であつた。又最近の布哇會戰に於て、我が海軍が一瞬米國太平洋艦隊の主力を撃破した、其の前夜も暴風雨であつた。遠くは元寇の役に於て、大敵一丸、海の藻屑と消えしも、大暴風雨であつた。又小さくは、織田信長が、勝ち誇つた今川義元を一撃の元に討ち滅した、其の日も、大雷大暴風であつた。

果して、此等暴風雨は、

暴風雨は、人工では出來ない。渡洋爆撃は、恰も暴風雨となつた。之れは暴風雨に乘じたのではない。

布哇會戰は、野村、栗栖兩大使が、日本の最後回答を、ルーズヴエルトに突きつけると同時

に敢行したのであつた、其の前夜が恰も暴風雨であり、敵をして全滅の隊形を作らしめた。之れ亦、暴風雨に乘じたのではない。

元寇の暴風雨は、日本軍が知らぬ間に起つたのである。又織田信長は、連戰連捷の今川義元が、己が城下に迫り、一擧我れを擊滅せんとする、其の寸前、火の玉となつて、ぶつかつて行つた。其の途中、大雷起り、暴風雨となつたのである、之れ亦、暴風雨に乘じたのではない。

斯く觀じ來れば、之れ等暴風雨は、何れも人工的ではない、卽ち『神風』である。

懼れ多くも、神武天皇が、御東征の御砌り金の鵄が何れよりか、飛び來り、天皇の御弓にとまり、燦然たる光りを放つた、爲に賊軍は、眼眩み、戰ふ能はず一瞬にして潰え去つた。之れ卽ち、『神光』であり『神風』である。

『神風』は我が國肇國の大精神より生れ、其の大精神が正義の火の玉となつて、ぶつかる。其處に甫めて、世界無比の「人爲以上の力」が生れるのである。

第六節　大東亞戰爭の特質と敵前上陸

今次、大東亞戰爭の特質は、

「長途の航海を經たる敵前上陸」

をやらねばならぬと言ふ處にある。支那事變當時とは異り西南大平洋全面に亙る廣袤數千海哩の、敵前上陸である。實に考へても壯快であるが、それだけに、敵の飛行機や艦艇の妨害が多いのを覺悟せねばならぬ。

然し巧みに其等の妨害を排し、奇襲上陸を決行すれば、其の效果は實に意想外である。即ち米英の根據地は散在的であるが故に、一度制海權を得れば、威力は絶對のものとなり、散在してゐる多數の敵陣地は、全部孤立する。而かも其れ等は小力なるが故に

「手足をバラ〳〵に斬られた」

事になり、互の救援なぞは思ひもよらぬ。結局窒息するの外はない。之れ即ち大東亞戰爭の

妙味のある處である。

而し敵前上陸の地點が多數であり、航路が非常に遠い爲に、其の苦心は普通ではない。

開戰當時は、數十萬の日本軍が、南方に於て敵前上陸を敢行せねばならぬのに、其の方面に敵艦艇は二百隻以上敵飛行機は千數百機以上もゐた。實に危險千萬であつたが、幸ひ輸送船にて損害を受けたもの、〇〇に過ぎなかつた。

第七節　外人の見た敵前上陸と日本精神

敵前上陸は、前述の如く捨身の戰法である。所謂、全員決死隊である。日本軍の戰鬪に於て決死隊はめづらしくはないが、敵前上陸の決死意義程、悲愴且つ壯大なるものはない。

陸上に於ける決死隊は、總じて小規模であるが、敵前上陸は、極めて大規模である。この多數の決死隊が、全滅するか否かであるから、壯烈と言はんよりは寧ろ悲壯である。

世界等しく驚嘆する處である。

或る外人が最近述懷した處に依ると、日本國は、實に不審の國である。其の中でも、「帝」と「天皇陛下萬歲」と「敵前上陸の巧みな事」とであると言つた。

一寸、面白い見方であるから、述べて見よう。

今次、大東亞戰爭の劈頭に於て、空前の大鐵槌を受けた、米國の黑艦は、嘉永六年六月ペル

リが、日本國に來つて開港を迫つて以來、日本國民とは、おなじみである。

ペルリは幕末の國論沸き返る中に、初めて日本國を知り、日本國民を知つたと述べたる、其の手記の中に、

「不可思議なる『帝』は、到底吾等の考へ及ばぬ、日本國の力である」

との意味を書いてゐる。先づ最初に「幕府は、日本國の全權力者であると考へてゐたが、それは大なる誤りであつた。幕府の上には『帝』と言ふものがあり、幕府は、『帝』の使臣であるを知つた。而かも其の『帝』は、直接表面には現れず、潛在的絶對力の存在である、實に不可思議である。

と嘆聲を洩らした。

之れは當時尊王攘夷の聲、囂々たる中にあつて、幕府に開港の交渉を重ねる、ペルリに取つては、心身に沁み亙つた感想であつたであらう。ペルリは、非凡なる頭もあり、腹もあつた男だけに、よく尊王の動きを看破し、志士とも交際し『帝』なる存在を知つたのであるが、而かは、形の上の『帝』を知り得ても、眞に『帝』の本體を摑み得なかつたのは、又無理もない事である。「否、昭和の今日、否々、大東亞戰爭勃發直前迄、日本の本體、即ち「帝」の如何に偉大なるかを、英米人は知らなかつたではないか。」

と呵々と大笑した。更に外人は語を次いで、日露戰爭當時、露國の將士間に、最も不思議とされた事は、日本兵が戰死の直前言ひあはせたやうに、

「天皇陛下萬歲」

を唱へて死す事であつた。最初は、其の言葉が解らなかつた爲に、大和民族が死に際のうめき聲だと、考へてゐた。而し其れにしては、餘りにおかしいので、通譯をして其の意を訊したそれは

「國王萬歲」

と解つた。國王萬歲なれば、首肯出來るの　――　けれども、上、將校より下、一兵卒に至る迄、悉くが、

「國王萬歲」

を唱へて死す、其の一致したる悲愴なる絶叫が、恐るべき一大印象となつた。

「吾等は國王の爲に戰ふのではない、自國の爲だ、自分の爲だ」

とのみ考へてゐる露國將卒は、犧牲を强要さる國王を怨まず、其の萬歲を唱へて死す、日本兵の眞意が、どうしても解らなかつた。

其の不思議は、遂に國王を暗殺して、革命國となつた露國である。

國王と、國土、國王と國民が、歸一無二である事は、露西亞人に解らう筈はない。否々、今日の敵國たる英米に解らう筈はない、これが解らぬから、日本國の强い事が解らぬ、從つて今回の如き誤つた戰爭を引き起したのである。

敵性國家が、日本國の本體が解らぬは、無理からぬ處であるが、大東亞圈內の諸國がよく、日本國を知るであらうか、其れが心配である。

と、外人は眞顏で首を垂れた。そして更に一歩を進めて、

私の知り得た處では、國王の爲に、臣民を犧牲にするは、東西の歷史に珍しくない、又、或る場合には當然でもある。けれども日本帝國に限り、斯る事實は斷じてないと思ふ。

何故ならば、

「日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之レ本體」

であり

「皇室ト臣民ハ一家族デアル」

からである。所謂、義は君臣であり、情は親子の關係である。卽ち日本國民は、煎じ詰めれば、天皇の『一』に歸し奉り、何物もないのである。故に犧牲と言ふ、言葉は生じない。

『天皇陛下萬歲』

を唱へて死す時は、

『天皇の（一）』

に歸し奉る、日本國民本懷の、歡喜の聲である。

凡そ外、强敵に當るに、國內が（二）や（三）に分れてゐては、勝利は覺束ない、當つて碎けるだけである。日本國の如く、

『天皇、國民、國土』

が完全に（一）に合致する國は他に絕對にない、怨やましい次第である。

「一億國民火の王だ」

は、日本國に於て初めて、言ひ得る言葉である。

又、今回の大東亞共榮圈も、東條總理大臣の宣言通り、

「八紘一宇」

の大精神の下に、各々東亞民族に安居を與へる御趣旨は敬服の外はない。これなればこそ、日本精神もハツキリ解り、巧みな敵前上陸も侵略でなく、『眞に世界一敵前上陸』たる事が判ります」。と語を結んだ。

第八節　敵前上陸と絕對和

我が國は今や、未曾有の超非常時である。一億一體となりて、國難に當らねばならぬ。其れには第一「和」が肝要である。前述の如く外敵に當るには、國民の心が、一致團結、如何なる事態にも碎けざる覺悟が必要である。

最近我が國の政爭が解消され、各方面に統制が行はれるのも、卽ち和を計るに外ならぬ。然し乍ら社會は却々複雜し、人心は强ち淸淨ばかりではない。

其處で和を得るには、國民平素の修錬が伴はねばならぬ。

修錬は卽ち和の基礎である。

第一次歐洲戰亂に於て、戰ひに捷つた獨逸が、何故最後に慘敗したか、他にも原因があらうが、第一人心の和を缺いたからである。

國を維持し政權を把握する爲、方便的の和や一時的の和は、必ずや破るゝ時が來る。如何な

る國難に遭ふも、如何なる事難が迫らうとも、眞底から和を成した國民は、必ずや最後の勝利を占むるのである。この眞の和こそ、目下我が國民の最大なる必要條件であり、緊急の修錬であらねばならぬ。而して、和には、敬を必要とする。先づ第一、我が國體に於て、皇室に對し奉りては、絶對敬である、父母、師長は勿論友情に對しても、絶對敬である。この絶對敬と結んで、甫めて眞の和が生じ眞の大東亞共榮圏が生れるのである。

非常時局は、第一線の將兵が如何に强くとも、銃後國民の和を缺けば、折角の戰捷も水泡に歸し、折角の東亞共榮圏も、中途にして瓦解せざるを得ない。

此の絶對和を、其の儘必要とするは、敵前上陸である。敵前上陸は超非常行動である、陸、海空一體となるは勿論、輸送船員と絶對和を以つて進まねば決して成るものではない。

如何なる事態が起るも、如何なる妨害が生ずるも、徹頭徹尾、絶對和である。

凡そ絶對和を得るは、却々容易の事ではない、前述の如く絶對敬を以てする平素の修錬、平素の訓練が必要なるは申すまでもない。

兵法奥義にも次の如く述べてゐる。

＝和せざれば、萬事成ることなし。和を以て要とすること、古今通ずるところなり。和せざる時は、戰ふと雖、勝つことなし。故に和して後、戰ふべきである。兵の和することは、主將道を行ひて之れを和せしむるに在り。上、道を行はざるときは、下和することなし。＝

絶對和は、單に喧嘩をしない意味ではない。單に仲善くやると言ふ程度のものではない。

「一億一心火の玉だ」

と同じ意味でなければならぬ。

第九節　敵前上陸と大勇

往昔、戰場で茶を立てた。今次の事變に於ても、陣中に茶を立て、大に賞讃を博した部隊がある。

酒はつけ景氣である。醉ひが廻つてゐる間は、非常なる元氣であるが、一旦　醒むれば却つて意氣銷沈する、これは即ち一時景氣である。刹那的の勇氣である。

奇襲敵前上陸は刹那的行動ではあるが、一時の勇氣や、つけ景氣では駄目である。眞に腹底から迸る大勇でなければならぬ。それには先づ平素腹が出來、眞に膽が錬れてゐなければならない。

心膽を鍛練するは、酒では出來ぬ。不斷の深淵なる修練に待たねばならぬ。雲霞の如き大敵を眼前に控へ、悠々一服の茶を喫んだ往昔將兵の心境は、以つて範とするところがある。一服

の茶と共に、既に敵を呑み、既に心命を忘れ、天地と共に、あらゆるものを克服する慨がある。

然るに、……戰場で茶を立てたは、往昔の事である、近代戰では、種々なる意味に於て不向きであると稱する者がある。一應尤ものやうである。近代戰は科學戰であり、機甲戰であるから、茶を呑んでゐられないやうに思はれる。

所が其れは大に意味が違ふのである。茶を立てると言ふ事は、強ちお茶を呑むと言ふ事ではない。

「下腹に力を入れる」と言ふ事であり「心に餘裕を持つ」

と言ふ事である。

「如何なる事態にも、卽應すべき頭と、如何なる困苦にも卽應すべき腹」

とを作る事である。この頭と、腹は、平素の鍛練に於て、充分出來てゐる筈であるが、いざ戰場に臨んでは、

「一層、引きしめる」

と言ふ事である。殊に敵前上陸の如き、突嗟的大勇を必要とする場合は、尙更

「頭と腹を撫でゝかゝらねばならぬ」と言ふ事である。

故に必ずしも茶を呑まなくともよい、又、茶は必ずしも、一定の場所、正規の道具がなくてはならぬ事はない、又必ずしもお茶でなくてはならぬ事はない。或は湯でも結構　――　水でも結構である。平素鍛練されたる、心膽を呼び起し「絶對力」の心境を味はへばよいのである

金剛不壞の心膽は、如何なる彈雨も懼れず、如何なる困苦も物かは、之れが卽ち敵前上陸の根本精神であらねばならぬ、この心膽を煥發すればよいのである。而かも弦は常に張つてゐてはならぬ。

第十節　敵前上陸と人生問題

敵前上陸は、兵法の最高調を取つたものとも言ひ得る。而して兵法は人生の最高訓である。人生は闘爭であるが故に、人生は兵法の如く進退すれば先づ以つて勝利を得られ、從つて敵前上陸は、人生々活に範とすべきものである。

然し乍ら人間は悲しき弱點を持つ、卽ち

「論語讀みの論語知らず」

と同じく

「兵法を學ぶもの兵法を知らず」

に流れ易い。故に人は、兵法其のものを學ぶ必要はない、其の要領を心得おく事は肝要である。

敵前上陸は、前述の如く兵法を根本とすれども、決して兵法のみに捕はれてゐない、日本國

民特有の大勇に依つて、敢行し得るのである。故に人は、人生生活に於ても兵法と大勇を心掛け、勝利を占むべきである。兵法と大勇は、一つは卽ち理論であり、一つは卽ち實行である。

昭和の今日に於ては、兵術が科學戰となり、機甲戰に變つたのと同じく、人生問題も、近代生活に卽應すべく、種々變化はあるが、而かも其の根本問題に至りては、敵前上陸と同じく其の適切なる行動に向つて、斷行すべき勇、卽ち三種神器の劍と同じ大勇は、益々必要となつて卽ち

「正に向つて必ず行ふ」

之れが、全體教訓であらねばならぬ。

第十一節　敵前上陸と兵法

敵前上陸は、兵法が根元であるは前述の通りである。兵法の根本を通ずる精神は、卽ち敵前上陸の精神でもあるのである。故に殊更、茲に兵法を擧ぐる必要はないが、其の中最も敵前上陸に適應したる。兵法二三を擧ぐる事とした。

＝攻むれば必ず取るは、其の守らざる所を攻むればなり、守れば必ず固きは、其の攻めざる所を守ればなり。故に善く攻る者は、敵、其の守る所を知らず、善く守る者は、敵、其の攻むる所を知らず。微なるかな微なるかな、形無きに至る。神なるかな、神なるかな、聲なきに至る。故に能く敵の司命たり＝（孫子）

之れは敵陣の虛を衝けと教へてゐる。卽ち敵前上陸の根本精神である。然し＝善く攻むる者は、敵其守る所を知らず＝と言ふ意味が肝要である。

過般の上海戰、敵前上陸の如く、虛を衝く暇もなく、術もない場合、眞正面からぶつかつて

行かねばならぬ。其の際は＝善く攻むるより外にないのである。之れ即ち大勇により打ち進むより外はないのである。次に＝神なるかな、神なるかな、聲なきに至る＝と言ふに至つては、孫子でなければ言へない言葉である。即ち、攻むるも守るも、其の術の極致、法の蘊奥に至れば、形無きに至り、聲なきに至ると言ふのである。即ち神域を示してゐるのである、神通力を教へてゐるのである。

＝攻むるは意表にあり＝

尉繚子は斯う言つた、敵の意外に出づるは攻擊の最も巧みなものである。敵前上陸は正に此の條件を第一としてゐる。

「降ると見て、笠とる暇もなかりけり、川中島の夕立の雨」

は、蓋し最もよく其の意を顯してゐる。用意をさせない、禦ぐ方法を考へさせない、呀ッと言ふ間に事を決してしまふのが上乘である。義經が鵯越の嶮を冒し、敵の背後から一の谷を襲つて、平家の意表に出たのは、今日で言へば、敵前上陸である。

漸く、鹿しか通はない路を、馬に乘り駈け下るなぞは、到底不可能だと平家の將士は考へてゐた。故に義經の策略は多大の功績をおさめたのである。

若し、攻むべき可能性があると知つたら、平家の將士も防備を怠らなかつたであらう。さすれば、寧ろ結果は逆となつて、義經の奇襲は、奇襲とはならないのみか、却つて慘々な眼にあつたかも知れない。

敵の意表に出づると、否とは、正に勝と負との岐路であるは、之れを推しても分る事である。

前に備ふれば後少し、後に備ふれば前少し、
右に備ふれば左少し、左に備ふれば右少し、
備へざる處なければ、少なからざる處なし、＝孫子

備へざる處なければ、少なからざる處なしと言ふのは、其の反對の意味が強い、日本國の國土は、且つて一度だも敵に侵され事がない、之れは備へざる處なければである。然るに敵を攻撃するには、其の備へざる處なき處おも、其の隙をねらはねばならぬ、敵前上陸の場合なぞは「備へざる處なき」

敵陣を豫想してかゝらねばならぬ、之れおも、撃ち破れと言ふのである。

孫子は尙、

「勝つべからざるは守るなり、勝つべきは攻むるなり、守れば則ち足らず、攻むれば則ち餘りあり」

と述べた、即ち戰ひは、攻勢に出なければ、餘力はない、爾後の策戰も巧みに出て來ないと言ふのである。

而して遠大なる策戰は、

「夫れ兵の事を爲す、敵の意を順詳し、敵を一向に拜せて、千里將を殺す、是れ巧みに事を爲すといふ」

と言つた、即ち戰を起すには、よく敵の情勢を知り、敵を一向に拜せ、即ち一方向に敵を併せて纖滅するは、戰略の尤も巧みなりと言ふ意味である。

今回の大東亞戰爭に於て、其の緒端布哇大戰を敢行したるは、此の戰術を用ひたのである。

敵前上陸は、其の戰術の精神は之れと同一であるが、戰の實狀に依ては、正反對である事が多い。即ち敵は、豫め敵軍の來襲に備へ、嚴重なる防備をなしてゐる。之れ即ち、

「敵は一向に併居」

されてゐるのである。

この一向に併居さるゝ敵防備の、比較的脆弱なる地點にして、而かも戰術上有利なる地區を選ぶ事が、敵前上陸の極意である、即ち害尠く益多きを獲るのである。

＝次に其の行動に關して＝

獨り敵前上陸のみに限らないが、其の行動を起すや、唯々迅速を尙ぶは言ふ迄もない。

クラウゼウキツは

「攻勢的戰爭の本性は、迅速果敢と、活動の繼續である」

と言つた。之に就き孫子も亦

「疾きこと風の如く、動くこと雷震の如し」

と言つてゐる。

東西の兵聖が、言ふ處全く等しき程、戰ひに迅速果敢は然かく必要である。況や敵前上陸に於ておや。然し事實は然う簡單にのみ運ばるゝものではない。種々なる障害が生じて來る。今回の日支事變に於ける、第三國敵性國家群の妨害、スパイ群の密報等々、種々なる故障を生ずるのである。之れに關し孫子は

「軍事の難きは迂を以て直と爲し、患を以て利と爲す」

と喝破した。つまり迂廻行動を以つて、直線行動となすは、寔に難事である、けれども玆所が戰術の極意である。種々なる障害を排し巧みに行動して、迂廻行動を爲す事に依つて、必然的に生起する軍の危險を轉じて、利と爲すと言ふのである。

敵前上陸に於て、其の行動を敵に知られざるは勿論、第三國の敵性國家群に、察知せられざるのみか、之れを逆に利用する事等は、即ち迂を以つて直となす行動である。

唯單に疾風迅雷的にのみ行動し、萬一、敵軍或は敵性國家群に發見されし際、如何なる事態を生ずるや。玆所には重要なる兵法の意義があるのである。

第十二節　敵前上陸と東西兵聖

孫武とクラウゼウキツ

孫武とクラウゼウキツは、東西に相對立する、世界の二大兵聖である。敵前上陸が、日本軍の專有であるとは言へ、其の骨子は兵法であり、兵法を論ずる以上、之の二大兵聖をさしおく事は出來ない。

孫武は有名なる「孫子」を著し、クラウゼウキツは「戰爭論」を以つて有名である。

孫子は其の昔、吳子、尉繚子、司馬法、李衞公問題、六韜、三略と共に、兵書七書と言はれ東洋兵術の代表であり、古來我が武術の至寶的經典であつた。

孫武は支那春秋の末期、齊に產れ、亂を避けて吳に走り、吳王を輔けて楚を破り、武名を四邊に轟かせたが、後、吳王奢侈に耽り、諫言を入れざるに及んで、遂に身を隱した。

孫子は十三篇より成り、其の思想は、黃帝から出たといふ。黃帝は七十度び戰つて、天下を

平定した常勝の名將である、而して兵書十篇を著した、孫子は之れを基礎とし、更に獨創を加へ大成したのである。

其の說く處、實によく兵法の機微を穿ち、枯淡にして雄勁、奇權密機、神鬼も避くるものあり、讀者をして日常生活の琴線に觸れ、知らず〳〵吾等の規範をなしてゐる。

即ち其の一、二を擧ぐれば、

「彼れを知り、己れを知るものは、百戰殆からず」

とか、

「徐かなる事林の如く、動かざる山の如し」

或は

「始めは處女の如く、終りは脫兎の如し」

等は日常に膾炙する處である。

昭和の今日に於ては、科學時代となり、其の兵術は、機甲戰であり、計數戰が基調をなしてゐるが、孫子の說く處、其の應用の範圍に至りては、或は狹められ、或は逆轉すべき點、なきにしも非ずと雖、其の兵法の根本精神に於ては、今日と雖、脈々として躍動してゐるのである。殊に敵前上陸の如き、奇中奇の戰術に於て、深く孫子の說を味ふべきではないか。

次にクラウゼウキツは、獨逸の人、今から約百六十年前、歐洲改造の大旋風時代に、マグデブルグに產れた。

十二歲の時、普軍の士官候補生となり、其の翌年弱冠、ラインのマインツ要塞攻擊に參加し、更に有名なるイエナ戰役に大隊長として參戰した。處が其の後、普國の政策が軟弱を極め、佛國と手を握らんとしたので、敵將奈翁の傘下に入るを潔とせず、走つて露軍に投じてしまつた。

玆の點、孫武が、吳王の腐敗を見捨て、身を晦したとよく似てゐる。後、普軍內に入るを許され、奈翁に最後の止めを刺した、ワーテルローの戰ひに、ブリユツヘル將軍の參謀として善戰した。更に後年歐洲再混亂に及んで、グナイゼナウ將軍と共に、對佛作戰計畫中、惜しくも

病沒したのである。

其の生存中は彼れを、單なる一將軍としか見てゐなかつたが、彼れが沒後遺稿「戰爭論」なる稀世の名著、世に出るに及んで、世人は呀ッと驚いた。それ程「戰爭論」は世を震憾させた。

其の說く處、戰爭は人類の偉大なる心靈的行爲であると道破し、精錬にして堪能深淵なる思想を基礎に、豐富なる哲學史學を組み入れ、該博なる專門的知識を以つて、第八卷を成してゐる。

クラウゼウキツは孫子よりも、ずつと近代戰的であり、今日我が國の兵學も、此の獨逸に學ぶ處多く、恰も我が盟邦として、共に世界大改革に望む、我が國民としては、更にクラウゼウキツの研究を新にすべきである。

孫武と言ひ、クラウゼウキツと言ひ、其の兵學の根本は同一である、二千年後の今日、或は百數十年後の今日と雖も、原理に於て變りはないが、之れが運用の妙に至つては、到底文書を以つて述べる事は出來ない。所謂、之等兵法の原理を、尤も至妙に應用したるもの

「奇中奇、敵前上陸」

である。敵前上陸を論ずる人々の參考の一端として、此の古今を通じ東西を通じての、二大兵聖を簡單に述べておく。

第二章　敵前上陸と一般知識

第一節　敵前上陸の一般

島國日本が何等かの目的を以て、一度敵と交戰狀態に入るや、その攻勢必勝の作戰は、先づ敵前上陸となつて表れねばならぬ。我日本は遠く桃太郎の鬼ケ島征伐はさてをき、神功皇后の朝鮮征伐より、豐太閤の征韓の役を始めとし、近くは日露役の第一軍の鎭南浦、第二軍の鹽大澳獨立第十六師團大孤山上陸、第一次世界大戰に於ける獨立第十八師團等の山東半島瀧口上陸等、將又今次支那事變に於ける松井大將麾下の精鋭の强行した、上海附近上陸及柳川覆面將軍の杭州灣上陸、及びバイヤス灣上陸等々、實に多くの輝かしい歷史を有し、海國日本の面目躍如たるものがあるではないか。諸外國にも、上陸作戰の戰史はある。しかし皆黑星である。遠

くは元寇の役に於ける、范文虎より前大戰の英國のガリポリの上陸作戰に於ける、ウインスト
ン・チヤーチル（彼は現英宰相であることは諸子は御存知である）等すべて敗退の歴史であ
る。

これはこの作戰が、並大抵の精神力では出來ないことを證明してゐる。世界に畏怖せられる
日本軍の突擊の精神卽ち皮を切らして肉を裂き、肉を切らして骨を衝く捨身の戰法、これが敵
前上陸成功の鍵である。今次大東亞戰爭の序幕はグアム島、フイリツピンの北部南部、マレー
各地に陸續たる精鋭上陸すといふまことに、豪華な前奏曲を以て開幕した。之の敵前上陸は皇
軍の傳家の寶刀で、軍事機密に屬するもの多く、詳かに語るの自由を持たぬが作戰上の問題を
ぬきにして一つの敵前上陸の經過を追つてみよう。

作戰が某目的達成の爲の、敵側某地點に上陸を必要とすれば、先づ上陸點を選定せねばなら
ぬ。これは戰略戰術の要求と、技術上の要求とに基いて、各種の方法手段によつて調査され
る。白砂青松を誇る名所案內の繪葉書も、上陸點選定の爲には好個の資料となるのであり、か
うして一目的の爲にも、數個の候補地が選定される。敵前上陸はその本質上、敵の不意且不備
に乘じ奇襲の利を收めることが必要で、これがためには企圖を嚴に秘匿せねばならぬ。

母國の基地で陸の精鋭を滿載した灰色の輸送船は、默々として出港、輸送指揮官は勿論船長
とても何處へ向ふのか知らぬ。企圖は全體に秘匿されねばならぬ。輸送船は數隻宛の船團をつ
くつて、海軍の艦艇に護衛誘導され、海上幾千浬、あらゆる困苦と缺乏とに堪へて航行を續け
る。

「某月某日〇〇に上陸せよ」

との最高統帥より命令が傳へられ、すはこそとばかり將兵の眉宇がびくりと動く、上陸の時
期は一定せぬが曉の奇襲効果をねらふ樣なことも度々ある。曉の靄は深く一寸先も眞の闇、船
團は隊伍を解き、やがて錨が却される揚陸作業の部署に就く、舟艇移乘の命令一下、周到な準
備と日頃の猛訓練に、ものをいはせてタラツプを下りて、發動艇に乘移る。第一回上陸部隊を
乘せた發動艇は輸送船を離れる。上陸地點に近づけば、上陸後の戰鬪部署に從つて、各發動艇

は一齊に分進する。

敵も遂に我が上陸を知つたか、照海燈はあはたゞしく海上を掃照、敵の機關銃が火を吐く砲臺も火蓋を切つた。何を小癪な第一回上陸部隊は一齊にザンブザンブと水に飛び込んで、海岸に地歩を獲得する。發動艇は第二回上陸部隊を迎へる爲輸送船に引返す、この頃より天漸く白み、敵機さへ跳梁して敵の我が上陸妨害は益々激しくなる。

我が護衛艦隊の上陸を掩護する陸海の荒鷲も、敵の據點に低空銃爆擊を續ける。奇襲が變じて強襲となるとき、戰場は靜から動へ、そして又忽ち阿修羅の巷と化して行く。砲兵も戰車も歩兵に續いて、續々と上陸が進められてゆく、裝甲艇は白浪を蹴立てゝ上陸部隊と泊地との連絡にあたる。水際に煙幕が張られる。敵の數機は泊地をめがけて攻擊してくる。一旦獲得せる土地は尺寸と雖も敵に委せず、第一回上陸部隊は、此の身粉に碎くともとの覺悟で、敵の逆襲を反擊して突擊する。この我慢この隱忍が、外國の軍隊には眞似が出來ないのである。

日本軍は突擊の前に、強制的に酒を呑まされてよつぱらつて突擊するとか、味噌汁、澤庵には何か精神を麻痺させる藥が入れてあるのだとか、外國人は考へる。笑止千萬、見損なつてくれるなと言つてやりたい氣持だ、これは申すも畏い極みであるが大君の邊にこそ死なめの精神の下に訓練された、陸海一體の作戰の妙味で、見方によつては此の時の兵士の氣持は氣狂かも知れぬ。光輝ある歴史に根源し、周到なる訓練によつて培養され、卓越な指揮統帥に絶對の信を置いた、必ず勝つのだといふ一種の氣狂ひかも知れぬ。かくて上陸部隊と揚陸作業に任ずる部隊との、渾然一體化した協同作業は、敵火雨霰と降る中を、戰友の屍を乘越えて上陸作業を進めて行く、海岸に占められた地歩は、かくてヂリ〳〵と擴張されて戰鬪は漸次陸上戰鬪に移る。

以上は敵前上陸の一場面を想像して、順調に話を進めたが、しかし上陸作戰には狀況の不明はつきもので、幾多の錯誤と幾多の疑心暗鬼も生ずる　こゝに敵前上陸が難かしくなる原因がある。グアムでもフイリツピンでもマレー其の他でも恐らく、これ以上の難戰が展開されたことだらう。

水際障碍もあり、敵の潜水艦もゐたことであらう。我が同胞が我が兄が弟が夫がそれをやり通した。

銃後の諸子は此の赫々たる戰果に醉ひしれ、長期に耐ゆる心に、いさゝかでも緩みが出てはならぬ、支那大陸を初め、この南方各地の、赫々たる敵前上陸の成功の裏には、極寒零下三十度の北滿に於て、又蜿蜒四千粁の支那大陸に於て、默々と守備に討伐に任ずる軍隊のあることを忘れてはならぬ。更に又陸海の精鋭の外に、輸送船の船長以下多數の船員諸君の、軍人精神にも劣らぬ海員魂が、大きな役割をしてゐることを忘れてはならぬ。

第二節　護送艦艇と敵前上陸

世界唯一、日本軍の專有たる敵前上陸は、皇軍勇士の、勃々たる大勇に依るは勿論であるが、大編隊の輸送船團を護送する、我が艦艇の力、與つて力あるは言ふまでもない。

護送艦艇は、單に護送の任務ばかりでなく、敵艦との交戰は勿論、敵前上陸に當つては、第一に、火蓋を切つて掩護射擊をなさねばならぬ。

掩護射擊は、輸送船を敵岸近く、上陸地帶に對し適當なる場所につかしめ、敵の態勢如何に依り、之れを行ふものである。

即ち、上海敵前上陸の如く、强襲敵前上陸を敢行する場合は、周到なる用意の下に、眞先きに猛烈なる掩護射擊を行ふのである。

奇襲敵前上陸に於ては、敵が奇襲に氣づき、射擊或は飛行機等にて爆擊し來る場合は、直ちに之れに對し掩護射擊をなすのであるが、敵が我が奇襲に氣付かざる場合は、唯守護の態勢を

取つてゐるのである。

玆に護送艦艇の一艦長の述懷を記すれば――掩護射擊をする時は、通常の戰鬪意識と差して變りはない。輸送船護送に當つては、子供を連れて道中するやうなものだと前提し、

「たしか常陸丸の琵琶歌に『千里を翔ける鵬も波には翼折れぬべし』といふ文句があつた。その通り如何なる陸の精鋭も海の上ではどうする事も出來ない。それで輸送船團護衞を簡單にいへば、子供を大勢連れて危險な途を行く樣なものだ、船團は軍艦の如く集團行動は得意でないが、一生懸命涙ぐましい努力をしてゐる。

支那と異つて南洋は目標がない。何處も同じやうな椰子の林だ、しかも上陸地點を間違へたら大變である。賴もしいのはわが乘員が良く働く事だ、いつもは注意してもぼんやりしてゐる樣な男が、何とも云はんのに良く氣がつく、それから彈を射つと皆が實に喜ぶ。ある日マレー方面へ向ふ途中敵機が突然雲の間から現はれた、直ぐ一發はなつと敵も驚いたと見えて爆彈を振り落すと一目散に逃げて行つた。然う言ふ時の愉快は譬へようもない。

第三節　輸送船團と航空掩護

世界をつねに驚倒させる、皇軍の敵前上陸、それにはわが荒鷲の協力こそ見逃せない。陸軍航空本部はそれに就て、左の如く發表した。

「海上輸送部隊の最も恐るべきことは、空から來る脅威で、ハワイやマレーで、海軍航空部隊が瞬く間に、敵軍艦を叩きつけたのを考へると、商船のごときは、狼にねらはれた羊のごとくである。今度南洋方面上陸は、僅か〇〇の損害、それも上陸を終つた後であつたのは、御稜威といふもに、航空部隊の活躍があつたからである。敵前上陸には、輸送船團の發航と同時に、戰鬪機の掩護飛行が開始される。燃料の少ない戰鬪機が、陸より數百粁、千粁の海上船團上空を一日に數回出動し、日沒まで交る交る掩護する。本大戰初頭には、シンガポール方面から、飛來した飛行艇が、まさに船團を發見しようとした時、瞬髮を入れず擊墜した。この飛行艇は恐らく、わが船團のことも、わが攻擊を受けたことも、無線で報告する暇もなかつたと思はれ

る。かくて上陸作戰の一歩は成功した。これと同時に、上陸地方面の制空權確保に、開戰第一日逸早く、陸海軍の航空部隊は、密接なる協力の下に、敵各飛行場を攻擊した。現に南洋の上陸でわが戰鬪飛行部隊は、逸早く敵地の飛行場に躍進した。それが如何に早かつたかは、〇〇〇方面で爆擊隊が、ある飛行場を攻擊しようと思つたが、そこには早くも戰鬪隊が著陸してをつたのでも分るであらう。なほ、上陸地點附近の狀況などに偵察飛行隊の活躍は重要で、必要な海岸線は悉く空中寫眞により細かに研究するのである。」

第四節　敵前上陸と輸送船

敵前上陸は、陸海空一體となり、而かも輸送船が絶對一致しなければならぬ事は、前章に於て述べた通りであるが、　輸送船の苦心は又格別である。

即ち、敵前上陸の輸送は、決死的である。敵彈雨飛の中を、輸送以外次の重大任務をなさねばならぬ。

第一　將兵の揚陸

第二　武器彈丸糧食等の荷役

第三　敵と交戰

等である。大東亞戰爭の敵前上陸は非常に遠路の航海を必要とする。輸送船の苦心は、日支事變のそれとは比べものにならない。

敵前上陸は、通常夜間午前〇時頃から、夜明前の間に敢行される。從つて揚陸作業―即ち荷

役は夜間である、晝間でも困難な揚陸作業を、夜間、而かも完全なる無燈の下に、迅速に行ふのであるから、想像も及ばぬ苦心である。

普通内地の良港にて立派な波止場を持ち、而かも風波すくなく、船が靜に浮んでゐる場合でも、防空演習の時なぞ、時々失敗する事がある。それが敵前上陸の場合は、大抵風波が高い。而かも眞夜中の無燈である。而して敵彈や魚雷を受けつゝ、一刻を爭ふ迅速さでやらねばならないのである。而かも其の危險さは、寧ろ歸路にあつて、敵との交戰は常に覺悟せねばならぬ。

故に單なる輸送船では出來ない。軍部に徵用されたる、訓練と教育がなくてはならないのである。從つて輸送船員は、將兵と少しも變りはない。其の勇敢さは、多數の死傷者を出すを以つても知る事が出來る。

第五節　敵前上陸と編成

敵前上陸の、一般輸送は前述の如く、單に港から港へと運ぶやうに、簡單には行かぬ。上陸作戰は、陸上に於ける如く、戰備部隊が展開の配置に就いた後、突擊に移ると同樣である。

即ち敵前上陸では、先づ出發港で部隊が乘船する、「これから突擊する」と言ふ態勢を取り、其れを其の儘、上陸地點迄運ぶのである。恰度歩兵が敵陣に突入する隊形である。

陸上では、歩兵が突入する迄に、砲兵が敵陣を砲擊したり、飛行機が爆擊して、非常なる掩護射擊をなし、敵陣を制壓して後、突進するのであるが、敵前上陸に於ては、この掩護射擊が充分である場合のみ考へられない。

殊に大東亞戰爭に於て、南洋遙かな處では、それが一層である。

而して輸送船團は、少くとも數十隻といふ、大船團を組み、前の船と一定の距離を取つて進む、敵の潛水艦の出沒海面等、危險區域に入ると、全く別な隊形を作り、巧みに敵に備へなけ

ればならぬ。

其の苦心は、一般の輸送では味ふ事が出來ない。將兵の上陸作業が終つてからは、普通の輸送卽ち物を運び、彈丸を運ぶ、港から港への輸送と、漸次變つて行くのであるが、將兵の上陸作業が、巧みに敵の眼を眩ましても、敵は其の後に之れを發見、輸送船目がけて、襲ひかゝるので、寸分の油斷は出來ないのである。

第六節　敵前上陸と輸送船員

最近敵國は航空機、潛水艦によりわが輸送船を多數擊沈した如く、宣傳してをるが、實際は全くこれに反して、最近の調査によると陸軍輸送船中沈沒したるもの、僅かに〇〇といふ好成績である。

そも〳〵上陸作戰における輸送船の損失は、平素の演習や圖上研究によると、上陸前において既に、多數に上るものと算定せられるので、今次の各方面に對する上陸作戰にあたり、最も懸念せられたのは、實にこの點であつたのである。卽ち開戰當初南方諸地域には、敵艦艇約二百隻、航空機千數百機を算してゐたのみならず、輸送船團の行動は、極めて大なる目標を呈するので、到底これを隱匿することは出來ないのである、現に今次の作戰において、上陸前既に敵に發見せられたのもある、然るに輸送船の損害が陸軍の使用してゐる數百隻の輸送船中、沈沒僅かに〇〇に過ぎず、ほかに若干の損傷をうけたものもあるが、乘組船員の機宜に適する處

置により、沈没を免れ、しかもこれらの損害は部隊の上陸、軍需品の上陸後のことであつた。かくの如き好結果を得られたのは、ひとへに御稜威の下、天佑を保有し開戰劈頭、わが海軍及び陸海軍航空部隊が、先制克く敵に鐵槌的打擊を與へて、これを慴伏せしめ、かつ護衛よろしきを制したにもよるが、また以て乘組船員の、異常の努力と機に臨んでの、果敢適切なる行動に負ふところが寔に多い。陸軍としてもこの點に對し、深く感謝し、從軍海員及び關係機關に對しては、次に述ぶる如く參謀總長より感謝狀を付與せられたのである。

第七節　敵前上陸と蔭の殊勳者

敵前上陸は、絶對和を必要とする事、別章記載の如く、又輸送船の重大使命を負ぶ事前述の通りである。而して輸送船團の「海の勇士」等は、將兵にも劣らぬ。大和魂を以つて、敵彈雨霰の中を、物ともせず、將兵の揚陸、彈丸糧食類の荷役に、一身を献ぐる事も前述の通りである。其の功績や實に偉大なるものがある。

此の「銃を持たぬ海の勇士」に酬ゆる爲、杉山參謀總長は次の如き、感謝狀を下附し、天下に其の功を賞揚した。

大東亞戰爭の緒戰に於て企圖せられたる南方要域に對する至難なる長途上陸作戰にあたり陸軍輸送船乘組員として從軍せる帝國海員は平素鍛錬の精神を遺憾なく發揮し危險を冒し苦難を克服し完全にその任務を遂行して日本海員たるの眞價を中外に宣揚し以て緒戰の赫々たる

成功に寄與せり、その功績誠に偉大なり、今や軍は帝國の自存並びに東亞永遠の平和確立のため斷乎として所期の目的達成に邁進せり、而して今次聖戰の完遂には敵のあらゆる防碍を排除して行ふ海洋交通の確保如何が影響するところ極めて大にしてこれがため本邦海運界の諸機關並びに帝國海運今後の活躍に期してまつもの洵に多し、宜しく宣戰の大詔を奉戴して各々その任務に殉じ君國に報ぜられんことを望みて歇まず、茲に緒戰の活躍に對し海員並に關係機關に滿腔の謝意を表す

參謀總長　杉山元

以つて、如何に大東亞戰爭に當り、「海の勇士」が、重大役割を背負ひつゝあるかを、察知する事が出來るであらう。

第八節　敵前上陸と軍馬

無慮數萬方キロに亘る、大東亞戰は、其の戰區寒帶と熱帶に跨り、我が將兵の勞苦は察するに餘りあるが、「物言はぬ戰士」軍馬は、影の形に從ふ如く、我が將兵に伴はれ、酷寒の北滿より大東亞戰に參加し、黑潮躍る南洋へと乘り切る、そして雄々しくも敵前上陸を敢行するのである。

雪靴を履かせ、保溫裝置を施してゐた軍馬は、航路も遠く、南海の旅を續けた。この長い間、狹い不自由な船中で、しかも「つらゝ」が下つてゐた厩舍から、急に身を焦す暑い熱帶地に連れられて、物こそ言はぬが、すつかり弱り切つてゐるのだ。しかし軍の作戰は一刻も忽せには出來ぬ。すぐに、硝煙立ちこめる、敵中に駈け込まねばならぬ。辛からうが頑張つてくれよといふ、將兵の氣持ちが通ずるのか軍馬は敵地近くに迫ると、グツと元氣を出して、兵隊達が敵前上陸の用意にとりかゝると、カン高い「嘶き」を聞かせて、士氣を鼓舞するのだ。さす

がに支那大陸の戰線で、彈雨の中を馳驅して來た、武勳赫々たる軍馬だけに、血が躍るのであらう。しかし武運拙く敵地を踏むことも出來ず斃れる不運な馬もある。

愛馬美談は數限りなくある。船酔ひでクタクタになつた兵隊は、疲れた體を引き摺つて、自分の馬の手入れに夜も晝も專念する。陽が上つて來ると、防暑帽をかぶせてやる。午後になると氷柱を用意する。それこそ人間以上に可愛がつて、明日の戰鬪に備へるのだ、長い船上生活が續くと、馬も食慾が減退して、次第に衰弱しはじめる。榮養劑の補給などに、細心の注意を拂はねばならない。寒いところから來た馬は、毛が四分あまりにも伸びてゐるので、これをバリカンで刈つてやつたりする。また敵前上陸の朝、兵隊たちは、水盃を交はしたのち、慰問袋の空袋に詰めて來た茶殼を、飯盒に盛つて食べさせて「元氣で行かうぜ」と首を撫でる風景など眼があつくなる。

銃後の茶がら献納運動に當る人達に、この話を傳へて、ドシドシ茶がらを送つて貰ひたいものだ。馬が長距離の航海をしたのは、日露戰爭直後濠洲產のサラブレット一萬頭を、わが國に購入したのが數字の上では、大きな記錄として殘つてゐるが、軍馬として赤道を越えてまで數千キロの征旅を敢行するのは、今度の大東亞戰爭が世界における最初の長途旅行である。しかも滿洲事變以來背の低い日本人向きに改良された、アングロアラブ系の軍馬の優秀性は、南方作戰の各地に於ても立派に實證されてゐる。

第三章　敵前上陸の實際

第一節　概　說

我が軍の敵前上陸の實際は、前章に於いて述べたる敵前上陸の理論より出でたるに外ならぬが、而かも藍より出でゝ藍より青き、物凄き行動と、決定的の戰果を如實に物語るものである。

外國の敵前上陸が、多く失敗に期するに反し、我が國の敵前上陸は、且つて一度だも、失敗に終つた事はない。

唯犧牲者の多寡に、差があるのみである。

之れは如何に、天下一品の我が敵前上陸と雖も免れ難い問題である。卽ち、

「敵に悟られぬ」

第一條件の程度問題である。敵前上陸の地點は、既に十二分に調査濟みであるから、敵の軍

備、兵力等にさして狂ひはない。又策戰上から來る變化、天候上から來る臨機の應變にぬかりはない。

唯、敵が感知の問題である。戰ひは「人」である。敵前上陸の如き、捨身の戰法に於て殊に然りである。敵が眠つてゐる間に上陸してしまへば上乘である。だがそれは先方の都合であり、此方は其の隙をねらふに過ぎぬ。

同じく敵前上陸と言つても、上海の敵前上陸の如く、既に敵が我が軍の敵前上陸に備ふべく周到なる戰備を整へ待ち構へてゐる地點に上陸するのは、極めて不利なる敵前上陸である。之れこそ眞の强襲敵前上陸である。敵前上陸のうま味はなく、困難のみである。

其れに引きかへ、杭州灣の敵前上陸、ボルネオ島等の敵前上陸の如き、極めて巧妙に行はれ、犧牲尠く興味深く戰果も多きものであつた。

即ち敵に悟られぬ、第一條件が可能であつた爲である。支那事變に於ける敵前上陸は、敵と言つても、支那軍許りではない。英、米、ソ等の敵性諸國が、血眼となつて、敵性行爲をなしてゐたから、之れ等敵性群に悟られぬやう、慘澹たる苦勞を重ねたものであつた。

大東亞戰爭勃發するや、我が國は斷乎敵國に對し、劈頭巧みなる戰法を以つて、制海權、制空權を得たが、其れでも殘存敵兵力があり輸送上敵國域が廣く、航海線が延びたゞけ、苦心も變つて、困難は一層である。

第二節　支那事變敵前上陸

1　上海の敵前上陸

第一次上海戰でも、第二次上海戰でも、事變勃發するや、支那軍は一擧、我が陸戰隊を擊滅して、日本租界を奪取する戰略を取つた。寡兵の我が陸戰隊は、よく之れを死守し、本國から陸軍大部隊の來援を待つたのである。

敵軍は、我が陸戰隊と戰ひつゝ、次で來るべき日本陸軍に備ふべく、周到なる軍備を固め、大軍を以つて、日本軍一歩も上陸させじと待ち構へてゐるのである。

かうした上海へ、

「必死上陸せねばならぬ」

敵前上陸が敢行されたのである。故に上海の敵前上陸程、悲愴なる敵前上陸はすくないのである。

昭和十二年七月七日、盧溝橋に火蓋を切つた、日支事變は、七月二十四日上海テロ事件となり、八月二十三日遂に上海敵前上陸敢行となつたのである。

二十三日午前三時四十分、我が〇〇軍艦によつて、長江下流〇〇地點に横づけされた陸軍〇〇部隊は、折柄月落ちて、暗黑の浪波搖れる、敵陣直前に上陸を命ぜられた。

先づ上陸地帶目さして、沿岸に碇泊中の我が軍艦〇〇隻から、熾烈な掩護射擊が開始された。空からは多數の我が爆擊機が入り亂れて敵陣に猛爆を浴びせる。

「時やよし」

と、我が軍艦〇〇内に待ち構へてゐた〇〇部隊長以下〇〇名の決死隊は、白襷に身を固め、一死報國の鐵心其の儘、輸送艇に乘り移る。

我が上陸を飽く迄阻止せんと、敵は新手の、第三十七師、第七十八師の精鋭を加へ、數萬の大部隊である。

「ソレッ」

と許り擊ち出す砲聲。彼我入り亂れて物凄い。

白襷隊の乘る船艇は、艇舷を鐵板で造つて武裝してゐるが、岸壁が敵彈によつて破壞され、艇を繫ぐによ　もない。

江の兩岸からは、文字通り敵彈雨飛、船艇目がけて襲ひかゝる。

船舷に散る敵彈、舷側に揚る數丈の水柱、だが決死の早わざ、遂に艇は岸壁につけられた。

「突進！　突進」

僅か二尺幅の鐵板を亘つて、勇士は躍り出た。白襷の姿が、見る〳〵暗みへ消えて行く。

「面倒だ」

と許り、水中へ飛び込んで、崩れ落ちた護岸へ、駈け登る兵もあつた。

忽ち、機銃、迫擊砲の集中、我が軍艦からも、砲口も燒けよと許り擊ち出す掩護射擊。舞ひ上り、舞ひ下り、地上を離れること、二百二十メートル掃射を浴せる我が飛行機、其の凄壯さ、譬ふるに物はない。敵の機銃掃射、手榴彈を潛つて、白襷はパタ〳〵敵を倒しつゝ突進す

る。バタ〳〵と倒れる味方、砲彈炸裂の明りに、戰友の屍を越え突擊又突擊。

「天皇陛下萬歲」

「確かりしろッ」

「やられたッ」

悲壯の聲が交々暗みに消える。

忽ち上る大爆音。

「地雷だッ」

倒れる兵士、流れる血潮、續く部隊も、續く部隊も、かうした慘澹を繰り返した。

夜は次第に明け初めた。我が掩護射擊は愈々激しい。敵は歩一歩と退き初めた。我が上陸部隊は續々と續いた。

斯くして午前七時〇〇停車場附近一帶は、我が上陸部隊によつて占領されたのであつた。

第二回敵前上陸、第三回敵前上陸と、上海附近の敵前上陸は續けられたが、何れも、同じ苦闘であつた。

それは、敵前上陸の第一條件たる、

「敵に悟られざるやう」

を蹴飛して、堂々眞正面から斬り込んだからである。斯くせざるべからざる程、事態は迫つて居り、斯くせざるべからざる程不利な立場にあつたからである。

多くの犧牲者を出して、寔に濟まぬ——とは、當時司令官の僞らざる告白であつた、

2　杭州灣敵前上陸

上海敵前上陸の悲壯なるに比し、杭州灣敵前上陸は、極めて至妙且つ犧牲僅かに數名と言ふ、奇蹟的成功を治めた。

從つて其の苦心は、慘澹たるものであつた。我が國敵前上陸策戰の第一人者、柳川平助中將が覆面將軍として、指揮されたのであつた。

昭和十二年十一月五日、午前二時、前古未曾有の大集團輸送船は、堂々暗黑の支那海を壓し

て南下した。數隻の護衛艦は、旗艦の命令下に、配置され、恰も大勢の子供を伴れて、監督し乍ら道行く如く、數船宛守護し乍ら進む。

この夜は風靜に、波もおだやかであるが、濃霧があり、空は暗く、燈管された船も暗い。唯護衛艦の信號燈のみ、闇を通して、檣頭に光つてゐた。

やがて杭州灣に入つた。

「ソラツ來たぞ」

勇士達は互に胸の高鳴るのを覺えた。

沈默と靜寂裡に、輸送船は、錨を卸し、舟艇を下ろした。午前五半である。我が勇士は、勇氣勃々、舟艇に乘り移つた。赤鉢卷をした決死隊は、眞先きに、突擊態勢を取りつゝ進む。後からも後からも……深い霧の中に消えて行く。敵の海岸目さして。

焦慮と不安の三十分。

「今にも擊ち出すぞ」

皆固唾を呑みつゝ待つ、待つ時間の永さ。と、小機銃の閃光が上つた。

「それッ」

上陸開始である、護衛艦は一齊に砲火を吐き出した。殷々たる砲聲が、暗黑の大海原を搖れる。次第に明けて行く空を、轟々と航空隊の爆音が之れに和した。〇〇基地から飛來して猛烈な掩護攻擊を初めたのだ。

「うまく行つてくれいッ」

艦上の人も船上の人も、心は唯一つ。

と、忽ち、狼火。

「上陸成功」

「萬歳ッ」

思はず叫んだ。續いて第二陣、第三陣、怒濤の如き上陸部隊は、なだれを打つて、海岸に襲ひかゝつた。敵は上海方面の第一線に、全力を傾け、杭洲灣は手薄でもあり、又油斷をしてゐ

た。我が奇襲を知らず、海岸線の第一線では殆んど抵抗なく、奥地に入つてから、漸く我が軍の襲撃を知つて、狼狽しながら逃げ腰で撃つて來たのであつた。

世界戰史上、未曾有の大規模な敵前上陸策戰が、斯くも見事に成功したのは、實に奇蹟と言ふべく、外人も呵つと驚いた。

輸送の途中、護衛艦が、外國船に見つかり、之れに我が大集團を見つけられては大變と、二時間に亘り煙幕を張つて、其の眼を眩らました。

續いて某國驅逐艦が、行く先きの要處に待機してゐるを發見、巧みに之れを誘導して、輸送船團に接近せしめざるやう苦心した。

それでも、どうして知つたか、――恐らく幾重にも張り廻らされた。支那のスパイ網であらう――〇〇の放送局では、

「日本の船團が大擧南下したさうだが、それは恐らく病院船であらう」

と放送した程、巧妙に行はれたのであつた。

雲霞の如く上陸した我が軍は、忽ち敵を鎧袖一觸、奔馬の如く驀進して、上海の側面をついたのであつた。

これが爲、敵に與へた大戰果は言はずもがなである。

3　バイアス灣敵前上陸

戰ひが長く續いた、日本軍は實力以上に、支邦奥地迄深入りし、夥しい消耗をした。北には大强軍のソ聯が睨んでゐる。英米の壓迫は愈々强い、到底廣東を攻略するなどは、思ひも寄らぬ、……かう高を括つてゐる戰區をねらつて、敵前上陸するのは、比較的妙味もあり又、苦心もある處である。其れは廣東攻略をねらふバイアス灣の敵前上陸だ。

敵は油斷を見せかけて、其の實、異狀な戰備を整へてゐるかも知れない。又廣東は支邦南部の首腦である、敵性國家群が集散常なく、鋭敏なる複雜な神經をとがらせてゐる。一寸でも感づかれゝば、一波萬波、直ちに防害さるゝは必定である。

恰度百度を越した、酷暑ではあるが、晴れ亘つた月空には、一點の雲もなく、風波も靜かに

金波銀波を搖がせた。

寔に懼れ多いが、この敵前上陸には、尊いお方が指揮して御在せらるゝと、聞く。（後で判つた處であるが、其れは秩父宮殿下であつた）身が一層引きしまる。十月十日と言へば所謂仲秋の明月に近い、浩々たる海原に、月は惜し氣もなく冴えてゐる。後から後からと續く、輸送船團は、油繪の如く、水彩畫のやうだ。

甲板上では、三々伍々或は月を仰いだり、或は上陸地點を指呼したり、中には詩吟をどなつてゐるものもあつた。かと思ふと船室では、忘じ難き故國への、たよりを書いてゐるものもある。

と、突如

「敵擊滅の好期到る、切に將兵各位の健闘を祈る」

と言ふ司令官の信號が下つた。

「スワ來たぞ」

思はず叫び、前方を見ると、月光に霞む遙か彼方、高き低き山々が眼に寫つた。

「バイアス灣だ」

と叫ぶものがあつた。時計を見ると、正に午前二時である。何時の間に進出したか、灣内既に我が兵船で一杯だ、船は靜に錨を下した。用意してゐた地圖を開くと、灣内の小島を幾つも通り過ぎて、既に陸上近くである。

直ぐ眼の前に、凄い山が屹立してゐる。鐵爐嶂と判つた。この山は屏風を立てたやうな岩山だ、次から次と要塞が續いてゐると地圖は敎へる。

「今に擊つて來るぞ」

固唾を呑む暇もない、赤星二發の信號燈、

「ソラ上陸出發だ」

思はず叫んだ、時計は午前三時、次から次と、滿載した鐵舟が、突進する。誘導艇は、悠々眞先きに立つて朗らかなエンジンの音を立てゝ走る。痛快だ、艦艇の掩護射擊もない。

飛行機も來ない。

「奇襲成功せりか」

つぶやく者もあつた。

赤、綠、黃さま〳〵な燈火が、走る〳〵一生懸命な突進だ。

「今に擊つぞ」

固唾を呑んだ者もあつた、だが敵は一發も擊つて來ない、皆睡つてゐるのか、七娘山、排茅山、揚梅嶂などの山々は、默々として夜の扉に閉されてゐる。

「奇襲！」

突嗟に

「天佑」

と叫んだものがあつた。要害堅固、守るに强い敵の砲壘が、一發も擊ち得ぬ、痛快！　それは寧ろ、身の毛がよだつ程、神々しさであつた。

だが、まだ安心は早い」

心に叫び乍ら、

「成功したいものだな」

と思はず傍の從軍記者に囁く、

「うまく行くらしいね」

同じ思ひの記者も、言葉尠なに固唾を呑む。

引つきりなしに舟艇は後から〳〵と續く、と、

「あッ」

薄もやの彼方、パツト揚つた信號！　上陸成功の發火信號だ。

「萬歲」「萬歲」どつと上る歡聲。

眞先きに、上陸を敢行した、下涌扞の舟艇からの信號であつた。

「萬歲」「萬歲」

後で知り得た處であるが、畏れ多くも、茲の時秩父宮殿下も、思はず萬歳を叫び給ひしとの御事であつた。

時に午前四時二十分、あちらからも、こちらからも、上陸成功の信號が續いた。默々として吾れを忘れ、見守つてゐた艇上の人々は、等しく感謝と感激にうたれた。

斯くして大部隊の敵前上陸は、大成功をなし、直ちに首都惠州を奇襲し、遂に廣東を攻略するに至つたのである。

第三節　大東亞戰爭と敵前上陸

1　香港の敵前上陸

英國、東亞侵略の據點、香港は、アヘン戰爭に依つて支那より奪取し、爾來百年餘多額の軍費を投じ、築き上げた軍港である。

日支事變勃發以來、茲所を據點に、極力我が軍の妨害と、蔣介石援助とを行つた、我が國民怨みの的である。

それ丈けに、敵も周到、防禦陣を固めてゐるわけであるが、我が陸海軍最高指揮官は、肇國の武士道精神に基づき、二度まで降伏を慫慂した。然るに敵は頑迷に之れを拒絶したのだ。最早、躊躇してゐる事は出來ない、止むを得ず、斷乎鐵槌を加ふるに決した。

之れに先だち、我が軍は既に香港の對岸、九龍を手中に治めてゐた、如何に難攻不落の香港も、最早運命は極つてゐるのである。然し世界有數の軍港である、容易には落ちない、十二時

間に亘る掩護射擊を浴せたのも無理はない。

此の猛烈なる掩護射擊に守られた、我が上陸部隊は、秘かに、啓德飛行場、九龍セメント工場鯉魚門等に、彈む息を押し鎭めて、突進の命を待つてゐた。

十二月十八日、午後九時四十五分である。

「出發、出發」

○○部隊長の壯烈な怒號が起つた。

「ソレッ」

決死上陸部隊は、舟艇に乘り移つた。第一先發隊は、○○の多數である。狹い水面を隔て、繁華な香港の火が移る。見つかつては大變と、わざと迂廻暗黑を求め、急潮と鬪ひつゝ、潛伏して靜々と進む。

上陸地點は、大古ドック左側ブレーマー角、ジャーデン看視山下方である。

「着岸」

部隊長は眞先きに飛び下りた。恰度其の附近は、敵の陣地が眞上にあり、頑强なトーチカが連續してゐた、所謂、敵の寢所に踏み込んだ形だ。

「進めッ」

部隊長の命令と一緒だつた、今迄氣づかなかつた敵軍は吃驚。

「ワッ」

と喚聲が起つた。白色の照明彈が打ち上げられた。一齊射擊の機銃の雨。

「進めッ」

決死隊は、物ともせず進んだ、耳を、鼻をかすめて飛んで來る彈丸、脚を射たれて、ビツコをひき〳〵進む勇士。トーチカから飛び出た敵兵の腰には、輕機が當てゝある。其の奇怪の姿から、急霰の如き彈雨である。

「突つ込めッ」

「キヤッ」

と奇聲を發した敵兵。

「エイッ」〇〇下士の日本刀の味だ。

見苦しい程體の大きい、敵士官が倒れた。

「ワッ」

と逃げ出す敵兵、ソレッと追ひ着いては突き刺す我が兵、肉彈又肉彈である。

敵も死にもの狂ひに戰つた、が、我が決死隊の肉彈には敵ではなかつた。九時五十分、遂に赤色の上陸成功照明彈は打ち上げられた。

續いて、第二陣も〇〇船で上陸地點に着岸、むらがる敵を排除しつゝ、第一陣に協力、戰果は刻々と擴大されて行つた。

此の敵前上陸に、第一番乘りをしたのは、九龍一番乘りの野口部隊であつた。香港が呆氣なく落城したのは、此の敵前上陸に依るは、勿論である。

2　馬來コタバル敵前上陸

大東亞戰劈頭に行はれた、眞球灣奇襲作戰と、馬來半島シンゴラ、コタバル、敵前上陸とは、共に昭和國民の、忘るべからざる一大痛快事であり、又一大悲壯事である。

馬來半島は、地形から言つても、英米勢力を抑へる、最も重要なる地點であり、玆所を獲得しておかぬと、シンガポールを攻略し、南洋、印度洋を制壓する事が出來ない。

「一方は布哇、一方は馬來」

とは、我が陸海軍の秘密なる、大策戰であつたのも無理はない。其れだけに敵の防禦も豫想外强かつた。

時は昭和十六年十二月八日未明、月明であつた。我が輸送船團は、南へ〳〵と疾走する。

「一體何處へ行くのかなあ」

行けども盡きぬ大海原に、流石强者も飽き〳〵した。勿論宣戰布告前であるから。

「地球の極まで行くさ」

戯言半分に言ふものもあつた。

突如！　艇は止つた。薄月の彼方に、見馴れぬ山影、荒波は強い、上陸地だ。

「何處の岸か」

訝ふ隙もなく

「上陸開始の信號」だ、時計は午前三時を指してゐる。瞬く間に小艇が突進し初めた。恰も、飛鳥の如く。

と、陸の彼方に爆音、一發又一發。

「ヤツ見つかつたか」

思はず叫んだ。果して敵は、我が船團を發見したのだ。敵前上陸の第一條件たる、敵に悟られざる策謀が、先づ破れたのだ。だが、其れは覺悟の上である。敵は待つてゐたと許り續けざまに擊つて來た。海岸一帶に、堅固な陣地を布いてゐるらしい。

「確乎やらうぜい」

お互の口々から本能的に迸る。

波はます〳〵荒れて來た。最初は海中遠く落ちてゐた砲彈が、段々に艇端近くなつた。

「畜生！」

午前三時半だ、突如現れた、敵飛行機！

「ヤツ、愈々本式にやつて來たな」

かうなれば、度胸が極る。來るなら來いだ、二機三機、四機五機、戰鬪機や爆擊機だ。我が輸送船團は、忽ち惡魔の如き翼下に治められた。

波は高い、月が落ちて海上の空は暗くなつた。轟々と炸裂する、砲彈、爆彈、相交つて物凄い。

「高射砲、確乎賴むよ」

敵岸からの、集中砲火は刻々激しい、我が船隊は、阿修羅の如く奮鬪、上陸作戰を續けた、が、本船を離れた上陸部隊の小艇は、きしみあひ、重なりあつて、進まうともしない。

「我が荒鷲は、遠くボルネオ灣の亂雲に、はばまれて來ることが出來ない。蜂のやうに敵機は

たかる。この不利なる條件の下に、輸送船は必死に戰ふ、舟艇隊は爆彈と嵐を潛つて、陸と、輸送船の間を往復する。

部隊長境井大尉、吉田、木谷、高司各中尉の率ゆる艇隊は、上空からつけ狙ひ、僅か五米位まで襲つて來る敵機を、睨み返しながら、

「岸へ岸へ――」

とわめいてゐる。

と突如、先方がパッと明るくなつた。

「パチ／／」

と異樣の音がする。指揮官も、兵も、船員も、其方を振り向いた。

「アッ」

「やられた」

皆、一樣、悲痛な叫び聲が起る。

「畜生ッ」

「畜生ッ」

先方を見ると、炎々たる火焰が、荒れ狂ふ波浪を染めた。

「〇〇丸だ」

遂に〇〇丸は火を發したのだ、傾いた船上で奮戰する高射砲隊員の姿が、阿修羅の如く描き出された、銃をかざした兵隊が、甲板に靴を脫ぎ捨て、海中に躍り込むのが、手に取るやうに見える。

惡魔の如き敵機は、得たりと許り、急降下を續け、掃射を浴せてゐる。

「畜生ッ畜生ッ」

我が友軍は、齒を食ひしばつて應戰した。一機又一機！　黑い敵機は、紅蓮の焰を吐き、眞逆樣に海中に突入する。泳いでゐる兵隊は、水中に沈んだかと思ふと、又浮び又沈む、本船から、

「銃を放せ」

「身輕になれ」

と叫ぶ。兵隊たちは、聞き取れぬか、一人も銃を離さうとはしない。

斯くして、ヤツト辿りついた上陸地帶は、波打ち岸から、白濱が續いて、約十メートル、鐵條網である。而かも屋根形の鐵線陣地に、三輪形の有尖鐵條網が入り亂れ、十重二十重に張り廻され、近づけさうにもない。

更に後方、約五十メートルの岡續きは塹壕と、椰子の木蔭に隱見する、トーチカである。

「ドドン、ドドン」

灰色のトーチカは猛烈に火を吐く。濡れ鼠になつて這ひ上つた兵隊は、波打ち際に上つたまゝ俯伏すより外はない。

「ドドン、ドドン」

頭をすれ〳〵に敵彈が飛んで行く。兵隊たちは、本能的に兩手で砂を掘り出した。そして顔を埋めた、次に肩を埋めた、次に前半身を埋めた、遂に全身を埋めた。

然し突擊心に燃える勇士達は、凝とはしてゐない。

「前進」

誰れ言ふとなく、嗾嗚つた。兵隊達は全身を砂に埋めつゝ、前進し初めた。即ち、もぐら行進である。

この時、味方の銃聲が俄然激しくなつた。鐵條鋏を持つた兵が、敵陣地に突進した。途端、轟然たる爆音が、砂煙を捲き上げた。

「地雷だ、地雷だ」

「氣をつけろ〳〵」

聲の終らぬうちに爆音は三つ四つ續けざまに轟いた。

兵隊達は、ドン〳〵もぐら突進を續けた。愈々鐵條網まで進んだ。

「さあ、この一線だ」

「突進」

兵隊達は、一齊に兩手をエンヂンの如く動かし初めた。柔い白砂は、火の玉のやうな兵隊達に搖き立てられた。

味方の銃聲、敵陣の砲聲、共に此の不思議な、もぐら突進の上に響く。

鐵條網は、次から次と切斷された。彼我の爆聲は益々激しい。

と、見よ、蜒々たる鐵條網の彼方、むく〳〵と起き上つた、土筆の如き鐵兜の群、皇軍の神々しき勇姿を。

「ワアーッ」

もぐらの兵隊は、一齊に起ち上つた。

「突進」

息をもつかず突擊した。

一瞬、不思議な感激に、敵も味方も氣を呑まれた。濛々たる砂塵に、沸き上る喊聲、其れは正に人の術とも思へぬ、鬼氣があつた。

砲聲は次第に衰へた、洗足の儘の突進は早かつた。塹壕も物かは、敵のトーチカは、間もなく占領されてゐた。

大東亞戰爭の、宣戰の詔勅を知つたのは、間もなくであつた。

3　フイリツピン敵前上陸

フイリツピン敵前上陸中、アパリ、レガスピー、リンガエンは、無血上陸に成功したが、ラモン灣地帶の敵前上陸は、壯烈悲慘を極め、マレーのもぐら上陸に比し、勝るとも劣らぬ鮮血を流した。今茲に其の兩面を記して好對象とする。

ラモン灣敵前上陸

十二月九日一杯、荒れ狂つた南風が、十日午前一時頃に、奇蹟的に止んだ。小波一つ立たない。下弦の月が蒼白く、澄み亘る海上をてらして、神々しい程靜かだ。

「武運に惠まれたぞ」

船艙の隈で叫ぶものがあつた。我が輸送船團は、音もなく金波銀波を蹴つて行く。

「靜かだな、詩吟でもやれ」

甲板でかう言ふ聲がした。堂々たる我が艦艇は、肅々として掩護態勢をとつて進んでゐる。威容全く身の毛がよだつ程だ。

午前一時四十分頃である。

「見え出したぞッ」

「陸地だ」

聲に應じて先方を見ると、墨繪のやうな連山や、銀色に輝く砂濱が見えて來た。眞に繪よりも美しい。

突端。

「バラ〳〵」

左岸地區から一齊に、銃火が咆え初めた。我が上陸部隊を敵は感知したのだ。

「何ッ糞ッ」

手早く輸送船を離れた舟艇は、矢のやうに陸上めがけて突進し初めた。敵は餘程慌てたものと見え、滅茶苦茶に射つて來る。

後二、三百メートルと思ふ頃、敵彈が舟艇を貫いた。

「カチン」

傍らにあつた自轉車に當つて火花を發した。と、

「天皇陛下萬歳」

の叫びが二、三度續いた。サッと生溫いものが、頰を撫でる。手をやつて見るとベットリ血だ、隣りの戰友がやられたのだ。

「シッカリしろ」

と叫んで抱き起さんとする途端、左足を厭と言ふ程叩かれた、彈丸が左足を貫いたのだ。

「しまつたッ」

と思ふ同時、又左腰を叩かれた。手をやつて見ると、彈丸が刺さつてゐる。

「何糞ッ」

と拔き取つて、ハンカチで傷口を卯へたが其の儘其處に倒れてしまつた。—(一兵實話)

——後で判つたが、先發隊は無事上陸はしたが、灣內を流れる幅八十メートルのマウパン河を渡る時に、敵の猛射を受け、彼の大江選手（後節參照）も戰死し、指揮官、植本中尉も卽死したのであつた。——

二番艇、三番艇、舟艇群は、次から次と、矢のやうに、陸上めがけて疾走する。隨所に喊聲が起る，銃聲はうなる。修羅の光景物凄い。

恰度其の頃である。マニラからヴイガンに通ずる海岸通りを、幾十臺のトラックが、ライトを打ち振りながら、狂走して來た。不意を衝かれて、狼狽した敵が急援したのだ。

轟然我が砲聲がなり響いた。と、忽ち疾走して來た圍列が亂れた。パッと眞赤な火を噴いて燃え上るトラック……三つ四つ五つ……

上陸部隊は、早くもドン〳〵戰果を擴大した。漸く明け初めた陸上には、日章旗が颯爽と、潮風にはためいてゐた。

「萬歲ッ」

一同は期せずして叫んだ。敵前上陸は成功したのだ。

大體、上陸を終らんとする時である。茜色の朝空をかすめて、敵の飛行機がやつて來た。其の編隊が手に取るやうになつた。

「來たぞ」

と笑ひながら叫ぶものがあつた。

艦艇から、一齊に高射砲が唸り響く。途端、紅蓮の炎を上げて、敵の一機が墜ちて行く、又一機、あゝ又一機、黑煙の尾を引いて行く。

「萬歲」

上陸部隊は、不思空を仰いだ、最早それ程の餘裕を持つてゐた。敵機の編隊は瞬く間に崩れ、

逃げ腰になつた。と又、新たな爆音が響いて來た。遲ればせに駈付ける虻のやうな形の、敵爆撃機の編隊であつた。

「高度が馬鹿に高いな」

「へッぴり腰だい」

ドッと笑聲が起つた。成る程虻形の爆撃機は、遠い高空から盲爆を續けた、さつと水煙りが上る。我が艦艇には一發も命中しない、上陸部隊には尙更だ。艦艇からは正確な砲射だ。忽ち二機、黑煙を噴いて海に落ちた。

陸上では、銃聲や砲聲が響いてゐる。奇蹟的、敵前上陸は終つた。

ラモン灣上陸後續隊の苦闘

以上、ラモン灣敵前上陸は、第一線部隊の實狀であるが、此の日後續部隊は、意外にも、一層猛烈なる敵飛行機の爆撃を受け、非常なる苦心を嘗たのであつた。

以下は一兵の實戰記である。

――われ〳〵は十日未明ルソン島北部〇〇海岸泊地に進入した、待ち構へてゐた敵の數機は猛烈な爆撃を開始した、われ〳〵は第一線部隊より數時間も遲れてゐたのだ、もの凄いうなりをあげてボーイングB一七型重爆撃機三機と双發輕爆機二機が强襲して來たのだ、移乘の舟艇が海岸五十メートル位に接近したとき輕爆は一齊掃射を浴せた、われ〳〵は思はず舟艇内に身を伏せた、波濤萬里を越え眼前五十メートルに敵地を望みながら、今こゝにわれ〳〵は散つてたまるものか。思はず、齒を喰ひしばつて瞑目した。敵の空爆は一時間續けられ、われ〳〵のリュツクサツクには數彈が命中し、フイルム臺は微塵に碎けてしまつた、しかし無事に上陸することが出來た。一段と高い小屋らしい屋根の上には、第一線部隊が打ち立てゝ行つた日章旗がはためいてゐた。

4　リンガエン敵前上陸

ラモン灣敵前上陸に比し、リンガエン敵前上陸は、案外スラ〳〵と行つた。それは上陸前夜我が海鷲が、サンフエルナンドの砲臺を、メチヤ〳〵にやつゝけた賜であつた。

月落ちて星のみ瞬く、南洋の夜を、上陸部隊を乗せた大船團は、船列堂々海を壓し、夜陰を衝いて走つてゐる。風も靜かに、波もおだやかだ。

と、行く手の彼方、海面を染める、パッと夕焼けの如き赤色、おや！　一瞬

「何んだらう」

一同はまた〻きもせず息を呑んだ。先遣部隊が、敵の兵舎をやつ〻けたのだ、と言ふものがあつた。

「馬鹿ッ」

指揮官の聲だつた。

「何んでありますか」

一兵卒畏る〳〵訊いた。

「敵の砲臺が燃えるのだ」

指揮官は笑ひ乍ら言つた。

「誰れがやつたのでありますか」

「馬鹿ッ」

其れ切り聲は止つた、船團が近づくに從つて、新たな火の手が、一ケ所二ケ所と渦卷くやうに上る。海面は黑い、火の手は赤い。火は手に取るやうに見える。天佑に惠まれた皇軍は、此の火の手を目標に、上陸地が指示されたのである。

「だが油斷はならぬぞ」

指揮官は重ねて呶鳴つた。敵の粒々辛苦した、巨大なサンフェルナンド砲臺は、反擊の代りに端なくも、我が敵前上陸の案内役を勤めて呉れる事になつた。

船團は血潮を流したやうな、海を截つて行く。此の砲臺は前日、我が海鷲が見事に爆擊し、大火災を起さしめたのである。この痛擊に、戰意を失つた敵の艦艇、潛水艦はまだ姿を見せない。

「着岸用意」

舟艇は、陸上目がけて吾れ先きにと走る〳〵。と、パッと躍り出た、白襷の一隊があつた。

「決死隊だ」

其れを先導に、上陸部隊は、雲霞の如く濱邊に躍り上つた。一瞬、銃聲が聞えた。何處かに敗殘兵でもゐるらしい。其の聲は申し譯けのやうであつた。彼方からも此方からも、上陸部隊の喊聲が聞えた。上陸成功の信號が暗を照らし、何處かで萬歳の聲がした。サンフエルナンドの砲臺は、まだ炎々と燃えさかつてゐる。日章旗が其の火に映えて、其の莊嚴さは言語に絶した。

其の頃から夜は、白々と明けて來た。上陸部隊は、意外の無血上陸に、勇氣百倍し、進軍の勇姿は威風堂々たるものであつた。我が海鷲の爆擊に、餘程の懼れをなしたものか、敵機は一機も見えない。

敵の砲壘を、思ふ存分叩きつけた、我が海鷲は、旭光に銀翼を連ねて、今も向遙かに獲物をあさるやうに飛んで行く。

「萬歳々々」

空に向つて、手を打ちふる我が上陸部隊の將兵は、意氣天を衝くものがあつた。

――

斯くて比島敵前上陸は、一つは苦闘であり、一つは無血であつたが、何れも成功戰果を擴大したのであつた。

5　アパリの敵前上陸

次に、アパリは巧みに奇襲效を奏し、無血上陸に成功したのみか、文學趣味さへ手傳つた。陸軍省囑託、東氏の手記より、其の間の消息とアパリの詩情とも酌む事とした。

東支那海の大濤は舷側にぶつかり、太い水柱となつて甲板をたゝいてゐる。搖れる船艙に充滿してゐる兵たちは、むかついてくる胸をもてあまし、ものをいふのも億劫らしくゴロ〳〵寢

轉んでゐる。夜になるとわれ〳〵は時化にいくらか慣れてきた。一枚づゝ服を脱いでもまだ暑い、やがて船艙で演藝會が開かれた、この船には文士もゐる。カトリックの牧師もゐる、少年航空兵もゐる、從軍記者もゐる、それがあつちでもこつちでも元氣いつぱいに歌ひ、踊り、笑つて溢れるやうな活氣である。歌聲のものすごい反響をこもらせて船團は〇〇哩の速力でぐん〳〵南へはしつてゐる。

「こゝで上陸して直ちに〇〇へ向ふ、インド菩提樹の茂みが、頭の上へ垂れる美しい並木道をトラックで快走して〇〇につく。」鳳凰木（合歡樹）をヴェランダの前に眺めながら餞別に貰つた「ガリーバーの旅行記」を讀み暮した〇日間、まだ戰地に乘り込むやうな氣分にはなれない、夕暮れになると大きなやもりが天井でないてゐた。われ〳〵はまだこれから出發する戰場を知らない。おそらくサイゴンだらうといふところに意見は一致した。われ〳〵が身につけたあらゆる教養、あらゆる技術、それを生かし働かしうる戰場ならばどこでもいゝのである。一日も早くこれから働く戰場の樣子を知りたい。それは渇え切つた人が水を求めるやうなものであつた。しかしその惱みが忽ち拂拭された。昭和十六年十二月八日その朝、空は美しい朝やけだ、突然〇〇の街全體が何とも名狀できない感激の嵐に捲きこまれた。宣戰の大詔が發せられたのである。〇〇に待機してゐた輸送船團はもう濛々と眞つ黑い煙を吐きだした、その日のうちに輸送船の甲板は、船室は、船艙は殺氣だつた日本人の顏で埋まつてしまつた。拔錨、全速航進、船團は黑煙をたなびかせ、まつしぐらに南へ進發した。わが船團の四方には堂々帝國海軍の〇〇艦が軍艦旗をなびかせ船團護衛の位置についてゐる。無線室から船員が飛んで來た、「ハワイ大空襲」「マレー半島敵前上陸成功」の第一報である。「おい遣つたぞ、遣つたぞ」誰も彼も、相手かまはず肩を叩き合ふ。船團の行くところは英文を必要とするところなのだ。午後になつて地圖の謄寫版刷りを命じられた。原紙に描かれた白い線が忽ち黑い地圖に刷り出される、みるとアパリ付近要圖とある。アパリとはどこの國のことだ、と忙しく眼をはしらせると「あツ、フイリツピンだ、フイリツピンだ」と誰とはなしに叫び出した、アパリは正しくフイリツピン北部の都邑であつた。われらの、日本の選んだ新しい戰場はフイリツピン島ときまつ

たのである。

夜に入つて海の空は美しく晴れた。船艙のなかはいよ〳〵熱氣が加はり汗がだら〳〵流れる。船員は海上と上空の監視を嚴にし緊張は刻々と昂まつてくる。そのうちに〇日の夜半一時か二時ごろアパリに敵前上陸だといふものがあつて、船内は異常にさわめきたつてきた、アパリとはどんなところであらう。敵はゐるのか、ゐないのか……みんな同じやうな疑問を胸で嚙みしめながら、口に出すものはない。靜かに銃器の手入れをやつてゐる兵隊の横顔にも、すさまじい闘志がはつきり眺められた。昨夜明るく輝やいてゐた星が、晝になつても銀色に光つて空に殘つてゐる。われらは上陸順番一覽表を謄寫版で刷り、夜に入つて入浴を許された、湯上りのさつぱりした氣分でハツチへ歸る、目の前へ大きく月が上つてきた。

上陸成功の合圖

船艙でうたゝ寢をしてゐると突然「總員起床」の號令が破れがねのやうに枕頭に起つた、眞暗な船艙は忽ち騒然たるものとなつた、劍のふれ合ふ音、甲板を駈けめぐる靴音、兵隊も船員も、われ〳〵もたゞ一心に上陸準備を急ぐのだ、あつちでもこつちでも號令が飛び交ふ、番號を叫ぶ聲が痛高くひゞく、甲板へ出てみると暗い海だ、うねりがひた〳〵と舷側をなめてゐる眸を凝らすと島影が微かに見える、燈臺の灯までぼんやりみえるフイリツピンだ。これが生れて初めてみるフイリツピンのすがただ、黑々とした島影は靜かに夜氣に息づいてゐる。敵はゐるのかゐないのか——また同じ疑問がこみあげてくる、海面が次第に明るくなつてきた、昨夕までの大うねりはすつかり凪いでゐる、兵隊は甲板にずらりと並んで鼻の穴を大きくふくらましてゐる。〇日間も蒸風呂のやうな船艙に閉ぢ込められてゐたのだから無理はない、陸はだんだん近づいてくる、薄明のなかに近づいてくる陸をみると兵隊は殺氣だち、興奮のせゐか白い齒をみせて笑つてゐるやうにみえた。一發の銃聲もきかないうちに目の前へ海岸が迫つてきた、まだ明けきらぬアパリの海岸は靜かに眠つてゐる、こんもりと黑い森のはづれに漁師の部落らしいものがみえる、船團の奇襲上陸は完全に成功らしい。内地時間の十日午前二時、船團は長い砂濱の沖にぴつたりと停りガラ〳〵と錨が下ろされた、早くも〇艇が數隻降ろされてエンジ

ンの響も輕く各船の連絡に走り廻る、各船艦は一せいに明滅信號をはじめた、〇隻の〇艇は〇〇名の兵を乘せて母船を離れ暗い海上を眞直ぐに海岸へ向つて走り出した、午前五時廿分であつた。月はかくれ〇艇のひゞきは次第に遠くなりやがて艇影は闇のなかに融け込んでしまつた。甲板上にぎつしりならんだ兵たちは一語も發せず黑い陸地をみつめ、耳を澄ましてゐる。たつたいま繩梯子を降りて〇艇に乘り込んでいつた先發隊の兵たちが、銃劍をひらめかして上陸する瞬間を息を呑んで待つてゐるのである。五分、十分――まだ一發の銃聲も聞えない、すると海岸にパッと光つた、赤い狼火！　あゝ、上陸成功だ「上陸成功」「二番艇上陸準備」と號令が飛ぶ、甲板上ではまだ狐につまゝれたやうな顏で陸をみつめてゐる、海岸は喊聲一つ起らず、森として靜かであつた、こんな靜かな敵前上陸があるものであらうか、明るくなつてきた海岸へ二番艇、三番艇とどん〳〵上陸が開始された、われ〳〵も第何回目かに黎明の砂濱へ飛び降りた、砂濱はあたり一面濱ゑんどうと書顏の花であつた、皇軍フイリツピン上陸第一歩の軍靴はこの咲き匂る濱の花畑へ踏み下ろされたのである、一隊また一隊とぞく〳〵上陸する部隊の軍靴はこの可憐な南國の花を踏みしだいていつた。

先發隊は上陸直後直ちに行動を起しアパリの街へ前進してゐる、寢ぼけ眼で起きてきた住民が眼前に現出したこの上陸部隊の活潑な行動を呆然とみてゐる、海邊育ちの故でもあらうか、彼らの皮膚の色は思つたよりも黑い、顏つきは豫想した通りだが眼光が案外鋭かつた、みんな枯れ木のやうに痩せてゐる、日本の校倉造りに似た彼らの住居は床が高く四方の壁は椰子の葉で葺いてある、十數戸の家が椰子の木に圍まれてゐた、兵たちはもの珍らしくこの椰子の幹に攀ぢて何十といふ椰子の實を落した。住民たちはグロテスクな葉卷莫をくはへて微笑して眺めてゐる、鷄や豚をもつてくる住民もある、軍票をやると大した喜びかたであつた、部隊と住民の間はけふはじめて逢つたもののやうではなかつた、しかしこの平和な交歡風景は敵機の襲來で破られた、ひる近くつひに敵機が一機上空に現れた、肉眼でやつと見えるくらゐの高空から爆彈を落した、自分はフイリツピン人の家で宣撫の第一聲をあげてゐた、主人が醬油のやうな地酒をしきりにすゝめるので口をつけた、とたん高射砲が鳴りだした、私は「きたな」と思ひ

ながら話をつゞけてゐると水牛牽きの若者が怯えたやうに「ノット・デンジャラス？（大丈夫か）」と英語できいた、彼らの言葉はスペイン語の訛が強く意思の疏通は容易ではない。敵機はすぐ姿を消したが間もなくまた一機現れた、非常な高度から爆彈を四個落したが船團から遙か離れたところに水柱をあげたに過ぎなかつた、その夜は敵機に狙はれてゐるその船團に歸つて寢た、寢てゐるところをやられたら、犬死ではないかと考へながらも、いつの間にかぐつすり眠つてしまつた。

十一日の午後になつて道路偵察隊について上陸した、サンヴイセンテの村は、前に島があり米軍の半要塞地帶になつてゐるので、住民に英語を話すものが多かつた、海岸から四キロ近く進むとわが荒鷲の爆擊のあとが數ケ所あつた、こゝからパラウイツグまでアメリカは軍用道路の工事をやつてゐたが、この爆擊に驚いて逃げだしてしまつた。夕方になると螢があたり一面に飛びはじめた、きのふあたりから付近の森林に避難した比島人たちが、ぽつ〳〵歸つてくる、海岸の小屋から灯影が洩れてくるので、のぞいてみると豆ランプの光のなかに、木挽の若者が一人ぽつねんとゐた、ボンテの森へ仕事をしにいつてゐるうちに母親がどこかへ避難してしまつたと訴へる、その顏立ちは日本人としか思へなかつた、住民とわれ〳〵の間にはもう紙一枚の隔てもなくなつた。

敵潛水艦現はる

船團は輸送の任務を果して引揚げて行つた、たゞ一隻がアパリの沖に碇泊してゐた、十四日の晝すぎ天幕のかげから「アツ潛水艦だ」と鋭く叫んだものがある。敵の潛水艦はそれまでにも、一度船團の襲擊にやつてきた形跡があつた。そのときは友軍の〇〇艦がこれを追ひ、黑白の煙幕を張り友軍機が空中から攻擊したゝめ、何事もなし得ずに遁走してしまつた、しかしけふは輸送船たゞ一隻しか殘つてゐない。海軍の兵隊が素つ裸になつて海中へ飛び込み、ドラム鑵を一つ一つ海に泛べて、泳ぎながら岸へ運んでゐた、突然海岸近くパツと大水柱があがつた、水柱は煙のやうに虹を描きながら崩れた、魚雷だ、輸送船はいつの間にか錨をあげて急に方向を變へてゐる。つゞいて第二の魚雷が、白い雷跡をのこして、船の眞つたゞなかへ驀進してき

た、船はまた方向を變へる、第三發、第四發—敵潜水艦はどこにゐるのか見えないが、魚雷發射の雷跡は鮮かに白い條痕となつて、無氣味に輸送船に迫つてくる、船上には人影もすくなく落つき拂つて方向轉換を幾度か繰り返してゐる、つひに八發目の魚雷がきた、もう身を躱しきれないのではないかと、陸上ではハラハラする、舵一ぱい、船はくるつと船尾を振る、危く、舵もすれすれに最後の魚雷も外れてしまつた。なんといふ鮮かな轉針だらう、八發の魚雷はつひに一發も命中しないのだ、船上からは砲聲がたてつゞけに響いて、敵潜水艦に勇敢に應戰してゐる、的を外れた魚雷のうち、二個はわれわれの天幕から、二百メートルほど離れた砂濱にのし上げて止つた、魚雷は止つてもスクリューはまだ物すごい勢ひで空轉してゐた、魚雷を射ち盡し砲擊された敵潜水艦は、潜つたまゝどこかへ逃げ去つたらしい。輸送船上にバラバラッと人影が現れて、陸へ手を振つてゐる、乘つてゐたのは海軍の人たちだつた、間近く敵潜水艦に狙はれながら、機關室で平然と働てゐるわが海軍の膽ッ玉の太さよ、まもなく上陸してきた水兵さんは「ほゝう、これがアメリカの魚雷か」と他人ごとのやうに眺めてゐる、これがわが海軍の獲得した最初のアメリカ魚雷だといふ意味である。

比島の若ものたち

比島人たちが皇軍をみる目は決して外國の軍隊を見る目ではなかつた、道路偵察にトラックを走らせてゐると、突然森のなかゝら若い夫婦ものゝ比島人が飛び出してきて、手をあげてトラックを停めた。用件をきくと戰爭で森のなかへ避難したけれども、別に戰爭もないやうだから家へ歸りたい、そのトラックへ乘せて、二番目の橋の袂まで連れて行つてくれといふのであつた。バルチといふスペイン人のホテルで、休憩してゐると日本語を教へてくれといふ若い住民たちが集まつてきた、パブローといふアパリの豪家の息子が、クリスマスの贈りものに「アメリカン・ヒストリー」を一冊くれた。フイリツピンのセレナードといふのを唄つて聽かせる若ものもある。砂糖きびからつくつた、燒酎をしきりにすゝめるものもある、日本語の手ほどきをやつてゐるうちに、素晴らしいフイリツピン料理が運ばれてきた。

天下無類の敵前上陸

フイリツピン敵前上陸は、以上、悲壯なる、ラモン灣敵前上陸、リンガエン、レガスピー無血敵前上陸、次いで無血上陸に詩情さへ酌み得た、アパリ敵前上陸と其の樣相樣々であるが、玆に又古今を通じて、恐らく天下一品であらう。グランデ島敵前上陸がある。

この敵前上陸は、皇軍の策戰妙を得たる、奇襲上陸の典型であり、神佑の顯れである。而かも其れが要塞であるだけに尙更である。

6　グランデ島要塞

フイリツピン、コレヒドール島要塞と並んで、西海岸スビツク灣に築いた、グランデ島要塞が、極めて小兵の奇襲敵前上陸に依つて、一瞬にして占領された。次は、此の痛快なる敵前上陸の實記である。

某日午前九時阿部少尉以下〇〇名は、新穗隊長からオロンガポ海岸、スビツク灣に浮かぶグ

ランデ島要塞の偵察を命ぜられた、名におふグランデ島だ、砲口が海越しに睨んでゐる。大勇を鼓し、日本刀とピストルを手挾んで、十時舟出した、オロンガポから僅か八キロの海上を〇時間もかかつて要塞島間近に辿り着いた。

波が荒くおまけに人間程もある鱶が、我々の船と競走で要塞に向ふ、引つくり返されさうで無氣味なこと夥しい、それでも「要塞に着く前に鱶に食はれてたまるものか」と餘裕綽々たる豪膽さ、いよ〳〵要塞島に近づいた。

正午過ぎだ、〇〇山の要塞砲がパツと大きな口を開いて、我々の前にのしかゝつて來た、島は無氣味な靜寂さだ、手漕ぎの櫂がせつせと水を搔く音がするだけ、コンクリート製の長さ三十メートルの棧橋が、オロンガポ東北部に突出してゐる、阿部少尉がまづ棧橋にとつついた、ついで田中一隆軍曹が素早く占領の第一歩を印した「射つてはならんぞ」阿部少尉はかう戒めてから、一氣に棧橋を走つた、誰もゐない、走る〳〵、無人の要塞である、幅一メートルもあるコンクリート防砦があり、その後は散兵壕の連續で、〇〇サンチ加農砲、〇〇サンチ要塞砲〇〇サンチ砲がグルリと、島を繞つて當面の海に砲口を向けてゐる、まるで大砲の展覽會をみるやうだ、素晴らしい砲の林だ、一九〇三年製の〇〇サンチ砲が二門、島の西南に遺棄され、サムパロツク岬に砲口を向け、强固なペトンで固められてゐる、しかもこの巨砲の砲彈は、昇降機であげさげされ、砲彈は電氣手動兩式で射擊は全周する實に完備したもの、島の北部礁邊に近く兵舍があり隣に將校官舍がある。

我々が心をひかれたのは、一頭の牛が幾日も餌を貰はずにキヨトンと、草原に繫がれてゐる哀れな姿だつた、飼主も遁げたのだらう。ぐるつと島を廻るのに二時間かゝつた、全周〇〇メートルもあつただらうか、完全無血占領、鹵獲した戰利品は、〇〇サンチ要塞砲二門、〇〇サンチ要塞砲四門、〇サンチ加農砲四門、〇サンチ舊式砲二門、〇サンチ加農砲一門、〇サンチ野砲三門、合計十六門、これらの砲彈四千三百八十二、このほか全長〇〇メートルのコンクリート製トーチカ、石油のギツシリ詰つたドラム罐三百五十、直徑〇サンチの觀測機、砲口照準器、彈藥運搬車等が無數にころがつてゐた。

無血敵前上陸は、數々あるが、敵の要塞がすばらしい軍備ばかりで、無人島であるは、餘り例のない事だ、それだけに呆氣なくもあり、痛快でもあつた。

7　ボルネオ敵前上陸

＝ブルネイ方面＝

英領ボルネオ西北部の中樞、ミリ、ルトン、セリヤの要衝は、我が陸海軍協力の元に、敵前上陸を敢行、世界に比類なき油田地帶を確保した。從來英國東洋艦隊の給油基地として、重大なる役割を果してゐた之れ等油田地帶は、今や大東亞戰爭完遂の給油庫と代り、新しき面目を施す事となつた。

昭和十六年十二月十六日、皇軍はボルネオ西北目がけて、敵前上陸すべく驀進した。我が堂々たる輸送船團は、南支那海にめづらしい、海風靜かに波おだやかな、航海を續けた。

軈て部隊長から、

「目的地到着」

の知らせがあつた。今迄、天も地も晴れ亘つた明朗な海は、一瞬にしてかき消された。

「ザザッ」

とスコールだ、忽ち暗黑の海面に、三メートルの激浪、小艇は木の葉の如く浮動する。

「今に飛んで來るかも知れぬぞ」

指揮官は早く早くとせき立てる。將兵は、暗い曉の空、瀧の如きスコールを浴びて、怨めし氣に、

「畜生ッ」

と舌打ちした。それでも斷然海上を突進した。次から次と小艇は續く。

セリア、ルトン、ミリ、何れも敵前上陸に成功の無電が母艦に飛んだ、スコールは間もなく止んだが、海に馴れない陸兵は、激浪にさらはれ、尊き人柱となつたものが三十餘名あつた。

之れ等の勇士を悼む間もなく、前進又前進スコール晴れ、漸く曉に近き空に、輝かしい日章旗がひるがへつた。

奇襲敵前上陸に成功したのであつた。

＝クチン敵前上陸＝

「吾等は今ボルネオ島、クチンに向ひつゝある、明夜、我が陸海軍協力部隊は、サラワク王國隨一の都市クチンに對し、敵前上陸を敢行する」

〇〇部隊長は、全員を集めて悲壯な訓示を續けた。

「既にこの邊りは、敵潛水艦二隻が出沒してゐる、一隻は擊沈されたが、尙一隻が橫行しつゝある。先きに我が輸送船團に對し魚雷を發射したとの無電に接したが、其の地點は深夜通過する。又、皇軍が先きに占領したるミリ方面に於て、敵は活潑に動きつゝあるとの報に接してゐる」

部隊長は一層聲を勵ました。

「全員直ちに配備につき、單騎敵陣に乘り込む準備を整へ、最善を盡せよ、我等は今から唯一騎、萬死に一生の覺悟で、敵陣を突破し、以つて與へられたる任務を遂行するのだ」

力强き訓示は終つた。全員の眉宇に決死の色が浮び、固い覺悟の脣を嚙み占めた。防雷が舷側から投げ込まれた。舳艫の砲門に、砲彈が裝塡された。

「さあ、敵よ來れ」

見張員は、凝と前方を見張る。ボートの掩布は取り去られ、救命具、食糧、醫療材も積み込んだ。愈々單騎否單船直行だ。白い南海の夏雲が、ふわり〳〵と流れる。折柄弦月が、銀波を蹴つて驀進する我單船を照した。

「日支事變に當つて、支那大陸の敵前上陸に、幾度か、御用船に乘つたが、こんな決死的な航海をしたことはない」

航海長は長大息した、其れ程眞劍な航路であつた。太平洋の制海權は我が手にありとは言へ、南支那海の殘存敵兵は、決して油斷がなるものではなかつた。

エンジンの音はけたゝましく鳴りひゞく。太陽は、紅を流して西に沒した。靜かに夜の扉が下りた。交代する兵の足音が、甲板の上を駈けて行く、其の夜は、まんじりとも出來なかつた

軈て白々と夜が明けた、西北の季節風は、漸く凪ぎて、唯一眸、紺碧の海と大空のみである。

船は南へ〳〵と走つてゐる。

午後二時三十分、俄然、非常呼集喇叭が鳴つた。

「ソラツ敵機だ」

大空の彼方、數十機の大編隊が見える。刻一刻近づいて來る。

「愈々來たぞツ」

全員は緊張した。一齊に空を睨んだ。

「アツ日の丸だ」

將に發砲せんとした一兵は叫んだ。

「日の丸だツ日の丸ツ」

「萬歳ツ」

一同は手を振つた。帽子を振つた、思はずハンカチを振つた。

一機一機と、本船のまはりに近づいた。上空で圓を描き初めた、マストをすれ〳〵に低空飛行した。機上から手を振つてゐるのが見える。

「萬歳ツ」

浪のやうな歡聲が空に向つて續けられた。〇〇を爆擊に行つた歸途であらうか、其れとも單船敵中に進む、本船を護衞して呉れるつもりか。將兵は無暗みに嬉しかつた。軈て彼方はるかに消え行く飛行機を見送つた、强者の眼には、涙があつた。

「愈々上陸地帶に近づいたぞ」

部隊長の通告があつた。南海の月は、物凄き青白さだつた、十二時も過ぎた頃、其の月は落ちて、滿天星のきらめきとなつた、遙か南の空に、十字星が見える、十字星は海往く人の、こよなき指南者である。

「あゝ吾等も、十字星を友に、南の海を走つてゐるのだ」

思はず空を仰いだ。譯もなく、ロマンチツクになる。

「上陸地に到着」の通告が下る、

忽ちキツとなる。軈て船は停止した。

「上陸用意」

命は下つた。甲板に出ると朝靄の中に一面の艨艟。奴！　槍でも鐵砲でも持つて來いだツ！

捨身の決心、必死と身構へる。と、

「ヤツ日の丸だツ」

「日の丸ツだツ」

海岸を壓する、船には日之丸が飜つてゐるではないか。よく見れば、我が輸送船團だ、軍艦もゐる。驅逐艦もゐる、掃海艇もゐるではないか。

「嬉し泣きとは此の事だね」

士官も兵も眼は涙に輝いた。暫時立ちすくむのだつた。〇〇部隊長以下一同、一心身を捨てて、危險極まる單船、長續航路、よくやつた。苦心の甲斐があつた。上陸は易々と運んだのであつた。

8　ウエーキ島（大鳥島）敵前上陸

昭和十六年十二月廿三日未明、嵐の中を海のつはものたちは、ウエーキ島の南岸をめざして進擊した。南十字星が瞬いてゐた。突如、スコールが沛然とやつてきた、月かげも星影も忽ち掻き消え、闇黑の洋上、あわたゞしき怒濤の咆哮と白い牙をむく、飛沫の狂瀾である。風速まさに十三米、これぞ天佑！船は島の直ぐ岸邊に着いた。〇〇艇から一齊に舟艇がおろされた。而し波はいよ〳〵高く、上陸地點の測定さへ不可能だ。これでどうして上陸できるだろう、皆心配顏である。貴重な時間はいたづらに流れる、いまはたゞ決行あるのみ「進發、着岸用意ッ」風の中に決然たる號令が響き亘つた。〇〇艇を離れた舟艇は、木の葉のやうにもまれ、ザ、ザーッと波をかぶりながら、敵岸に突進しはじめた。輸送船自身も、舟艇の往復を待つてゐては、機を逸する、火の玉となつて突つこんで行く、上陸戰史に且つて見ざる嵐の前の捨身の敵前上陸である。この時わが上陸に、感づいた敵陣から、探照燈の光とともに、海面が眞つ赤に

なるほどバリ〳〵と火箭を浴びせて來た。うるしのやうな暗黑の舟艇の上で、全員は彈丸を拔き着劍した「肉彈だ、敵の優勢な火器を沈默させるには肉彈のほかない」からだ。兵たちは默々として全員彈丸を拔く「小敵は悉く刺し殺せ、大敵は悉く捕虜とせよ」『敵は優勢だが怖れるな、みんな一緒に死んで貰ひたい」部隊長の訓示である。

山本司令長官の發せられた「皇國の興廢、かゝつてこの征戰にあり」の力强い一語々々が沸々と胸にたぎり立つ。幸ひ敵はまだ射つてこない、一分が一時間のやうに感ぜられ、また十分が一秒のやうにも感ぜられた。ザツザーツと砌を嚙む音、いま目指すウエーキ島にわれらは達した、何も見えぬ眞暗闇、見ゆるは唯天上に瞬く星と、舳に碎ける波だけだ。敵はまだ擊つて來ぬ。突如艇長が叫んだ「着岸用意」さつと甲板にひれ伏す。ヅヅヅシーン海岸に乘り上げた。『それツ上陸』と立ち上らんとした刹那敵は火蓋を切つた。

前方の暗闇から物凄く砲彈が飛んで來た、一彈は甲板上に炸裂する「あツ」といふ間に數名がバタバタと倒れた「早く早く」部隊長の火を吐くやうな叫びだ。梯子を傳ひ、綱にすがり、無我無中の上陸だ、岩礁に足がついた、水が深くて歩かれぬ、銃を片手に必死、物凄い激浪に危く呑まれそうになつた。

「何くそッ」

齒を食ひしばり、やつと渚にたどりつく。砲彈、機銃彈、敵彈はいよ〳〵猛烈、波打際に身を伏せたまゝ、微動だもできぬ。闇を縫つて飛ぶ敵の曳光彈は、物凄く花火のやうだ、敵陣は五十メートル位の、近距離らしい、眞暗で方向が全然分らぬ、服がビショぬれで寒さがひしひしとこたへる。青白い不氣味な探照燈がサツと流れ、思はずハツと砂に身體を押しつける。

「天皇陛下萬歲」

味方が一人二人悲愴な叫びとともに倒れてゆく。暗いので一發の反擊もできぬ。折りも折又もスコールだ、暗黑の空から瀧のやうな雨だ、寒い！　凍るやうな寒さだ、依然やもりのやうにへばりついたきりである。このまゝ夜が明けたら、我が軍は全滅だ、氣は焦せるが、どうすることもできぬ。敵彈はます〳〵猛烈だ、彈道は極めて低い、背中のガスマスクにプス〳〵機

銃彈が當る。だんだん削りとつてゆく、臀部をスレスレにかすめる。

「畜生ッ」「畜生ッ」

金縛りになつたやうで一寸も動けぬ。刻々時は過ぎる、死か突擊か一寸、二寸、ぢり〳〵と匍伏前進する、敵陣二十メートル、もう直ぐと思つた、瞬間、物凄い手榴彈の雨だ、其時、

「突擊」

部隊長の號令が下つた。

「よし」

敵陣めがけて突込んだ、何やら、ペチヤクチヤ叫ぶ大きな影を、めちや〳〵に突きまくつた巨大な一つの影がぬつと現はれた、ギヤング映畫其の儘、自動小銃を抱えて射つて來た。味方の一人が、

「この野郎」

と突込んで突き刺すと同時にバツタリと倒れた。この突擊で敵は浮き足たつた。午前二時だ漸く夜も明けはじめる、敵の砲擊は依然激しく前進できぬ。〇〇兵曹長は〇〇部隊長と灌木に身を伏した、そして前方高角砲陣地を偵察した、とダダダ、、、と十三ミリ機銃の掃射をうけた、鐵兜にかつ〳〵と無氣味にひゞく。部隊長は鼻梁を打ち拔かれて、バツタり伏した。

「部隊長々々々」

と呼べども遂に答へない、名譽の戰死だ、まだ身體は溫かく腕時計ばかりが、コチ〳〵と動いてゐた、時正に午前四時五分、兵たちは直ちに部隊長を背負ひ乍ら戰つた。部隊長は兵の背中に、軍刀を握つたまゝ、最後の戰鬪まで部隊と行動を共に、飽くまで無言の指揮を續け、その任を全うしたのであつた。

勇士達は涙を拂つて、憤然と起つた。足をやられた〇〇隊長も匍匐しつつ、指揮をしてゐる〇〇部隊長も胸部貫通の重傷を負つた。憾み深き敵の機銃座は、肉彈ですぐ奪つた、つゞいて目指す高角砲陣地をぐるりと四方からとり圍んだ、すると敵もあつぱれだつた、肉薄するわが進軍に、一齊高角砲座をとりまいて死守し、スツクと立つて四方を自動小銃で掃射する、手榴

彈を叩き込む、その敵の姿が墨繪のやうに浮ぶ。アメリカ產の、ギヤング映畫のやうに腰にピタリとベルグマンをあてゝ、ドドドーツと擊つてくる。我が軍は火焔瓶を叩き込んで應戰した。敵は砲座の臺金の下にもぐり込んで擊ちまくる。

「肉彈だ」「肉彈だ」

我が軍は遮二無二突擊した。夜明け頃、飛行場の傍まで來た、目の前の防空壕が火を吐いてゐる。砂煙りで目もあけられない、最後の奮戰に移る、タターツと〇〇二曹が飛び出した、かと思ふと壕の入口の直前で手榴彈を敵にぶちこんだ。とたん、グツと前のめりに倒れた、壯烈なる戰死だつた。頭上に突如轟々たる爆音が飛來した。

「友軍機だ!!」

敵陣地めがけて痛烈な爆擊が開始された、勇士達の顏に生氣があふれる、手榴彈が飛ぶ擲彈筒が唸る、喚聲があがる突擊又突擊、さしも頑强に高角砲臺に據る敵兵も、全滅したのであつた。こゝに南岸の敵防備陣地は突破されたのである、午前六時四十分、激戰六時間餘に亘る奮の賜物である。海岸をふり返り見れば負傷した〇〇艇長、燃える艇と運命を共にせんと獨り艇に殘り、嚴然と艇上に佇立、手もちぎれんばかりに振つてゐるではないか、打振る手先から無言の聲が傳はつて來る、生死を超越した身とはいへ艇長の雄々しさは感激の一瞬であつた。

……

他の方面に着岸した部隊も苦戰であつた。

島に着岸するや全員飛鳥のやうにとびおりた、珊瑚礁の骨のやうな硬さが、足の裏を刺す。ドーンと上陸成功の赤い火箭があがる、友軍もぞく〳〵上陸に成功したらしい。それと入違ひに、敵機銃の曳光彈が、一面に花のやうに咲く。敵彈が珊瑚の硬いかたまりを碎いて顏一面にザラ〳〵とかぶる、敵の十三ミリ爆銃座がすぐそこにあつた。

「おのれッ」

と飛びこんで、銃劍で突きまくる、脊の高い男がワツと奇怪な叫びをあげて、逃げ出した。

闇の灌木の中だ、敵は右に逃げたか左に逃げたかわからない。またひとしきりダダダと射つてくる。

「彈丸をこめるな、肉彈で進め」

部隊長の雷のやうな聲だ、兵は肉彈で突つこむんだ。激鬪につゞく激鬪、死鬪に續く死鬪、そのうちに、ほの〳〵と夜が白んできた。右へ左へと進む兵の前に、小山のやうに聳える防空壕があつた。それッと飛びこむ。壕の前の灌木の機銃座からガン〳〵射つてくる、夜が明けては白兵戰は不利だ、しかし肉彈のほか途はない。

「みんな散らうぞ」

部隊長は一瞬、突擊命令を下した。突擊に移つた兵たちは、ばたり〳〵と、前のめりに倒れる。敵彈に當つたのではない、くもの巣のやうに、一面にはりめぐらした、電話線に引懸つて倒れるのだ、よくもこんなに、電話線ばかり引張り廻したものだ、つぶやく暇もなく正面と左手の二方面から、ワーッと敵機銃陣に躍りこんだ、右手で兵の一人がズブリと敵を刺しとほした、ギヤッ、と雉のやうな聲を頭のてつぺんから出した、敵兵がバラバラと右手の灌木に逃げて行く、十數名もゐたのか、やがて恐怖におの〳〵いた一人の敵兵が、あり合せの棒切に、うす汚いハンカチを吊るし、打ち振りながら出て來た。それにならつてぞろ〳〵と、即製の白旗をかゝげた十數名が、灌木の茂みから兩手ではひ出してきた、べつたりと腰を拔かしてしまつてゐる見憎さ。

「野郎ッ戰友の仇だッ」

兵が一齊に刺し殺さうといきり立つ、

「待て待て」

と部隊長は制した。こんな小敵を刺し殺すはいとやすいが、白いドライヴ・ウェイを距てゝ前面の大防空壕には、まだ大敵がウヨウヨとベルグマン銃で狙つてゐる。兵は電線をみつけてすばやく一人々々をふん縛つた、しかしどうしたことか、その防空壕から敵は射つてこない、この態勢なら我が方は極めて不利であるのに射つてこない、フンこれがヤンキー魂といふもの

か！　兵たちは靜かに一歩進みよつていつた。すると防空壕の敵は兩手をあけてあとから〳〵飛び出してくるではないか、ゐるわ〳〵五十名は結構ゐる、だが困つたことに、こんどは彼らをふん縛る電線が、堅くて引切れない、後ろで兩手を縛り千メートルも前進するのに、一時間もかゝつた、彼らを捕虜としたのは、五時半ころだつた……、もう陽は高々と輝いてゐる、白いドライヴ・ウエイの曲り角までくると、突然黑塗りの乘用車が全速力で飛んできた。兵たちはバラ〳〵といなごのやうに、之の自動車に、銃劍を突きつけて飛びついた、なかには黑い折襟に、金モールで飾つた航空兵中佐と幕僚が數名乘つてゐた。その中の一人が敵將カニンガム中佐だつた。彼らはこの狹い島のなかで、どこへ狼狽へて逃げ出さうといふのか、わが銃劍の襖に觀念したか、車中から白旗を出して示すのだつた。着任まもないこの敵將の表情は、はつきり氣勢をのまれてしまひ、哀願の色さへ宿つて見えた。兵はこの敵の幕僚らを數組に分け、白旗をもたせて敵陣に向つた、敵の部下たちへ降伏勸告である。そして彼らが「ストップファイヤ、ストップファイヤ（停戰せよ）」と叫ぶと、敵兵たちが壕の中から、兩手をあげて續々〳〵飛び出してきた、幕僚たちの蒼ざめた顏にひきかへ、これはまた、拳闘の試合でも終へたときのやうに、屈託のないケロリとした表情だつた、兵たちはこれらを片つぱしから、武裝解除して裸にした、目にあまる數だ、裸にでもしなければ監視のしようがない、そしてトラックを一臺みつけて、カニンガムに白旗をもたせウエーキ島を北上した。

ピール島境の木橋の裾まで、掃蕩したのは正午ごろだつた、ピール島はわが海鷲に爆擊され物凄い砂煙があがつてゐた。その爆擊の終るのを待つてピール島を完全に掃蕩したのは二時を廻つてゐた、チラと空を仰ぐと、澄んだ青い空だつた、急に空腹を感じ、傍らに轉がつてゐた敵のパイ罐の汁を思はず一息にのみほした。（實記）

9　ポンチヤナツク敵前上陸

赤道直下に横はる、世界唯一の都、ボルネオ島の西南首都ポンチヤナツクは、極めて愉快なる敵前上陸に依つて、我が軍の手に歸した。

既に同島の要地を攻略したわが部隊は、續いて、行動を起し敵の退路遮斷と海岸線の都邑シ

ンカワン、マンパワを占據、敵を包圍せんと、ポンチヤナツクへ急進擊した。シンカワンまでの行程約五十キロ、この間の道路は坦々(たんたん)兩側には、椰子の森林が亭々と聳え、星光りが故國の夢をそゝる、やがてシンカワンに入城、部隊は一旦休憩し、しばしの假睡をとつた、後一隊は敵の航空基地、ペンカヤン、レト兩飛行場に進發した。本隊は再び船艇機動によるポンチヤナツク進擊(しんげき)を開始した、このポンチヤナツクは、實にスマトラに面するボルネオ西海岸カリマタ海峽に注ぐカプアス河の分流、ポンチヤナツク河の上流約十キロの地點にある、人口約五萬市内にはゴム、製氷、製材、コプラの各工場があり、また海底電線の陸揚地として附近交通の一大中心地である、而して、蘭印(らんいん)政府は西部長官を配して、政治の中心としてゐた、市の中央を流れるポンチヤナツク河は河幅約八百メートル、水上機の着水が容易であり、政治、軍事、商業の一大中心地である。

本隊はシンカワンを拔錨(ばつべう)、一夜を舟艇に、翌早曉(よくさうけう)パシカイ岬の入江にあるマンパワに待機する、いよ〳〵こゝから目指すポ市には十五キロである、舟艇の上には椰子の葉を蔽ひ、敵機の來襲に備へた。奥地へ奥地へと追ひつめられた敵は、飛行艇により僅かな抵抗を試みてゐる。愈々(いよ〳〵)進發の命が下つた。

指揮艇を先頭に、敵前上陸の態勢は整へられた、海上でも赤道下の太陽は、燒きつくやうに暑い、船の兩側に銃を握り、前方を見つめる勇士の背には、玉の汗がにじんでゐる、指揮艇から突如戰鬪準備の命が下つた、この時南方に黑一點、敵機(てきき)らしいものが現れた。それが段々に近づいて來る。こわ〳〵敵機が船團を襲はんと舞下つて來たのだ、だが船團は悠々たり、少しの動搖もなく速力(そくりよく)を緩めず、船列を正して進んだ、敵機なぞ眼中になしの光景(くわうけい)だ、敵機は逃げ腰ながら、掃射をやつたが、それは徒らに海面を縫ふばかりで何れかへ逃げ去つた。

段々進むに從ひ、海面はジヤングル地帶の河特有のどす黑い色に變る。砲搭載の舟艇が先頭に立つた。愈々戰機正に熟した。大利根の流れに似た緩(ゆる)やかな水流は、ジヤングルの根を洗ひ、樹木はいづれも根を露出して、無氣味である、約五キロも溯行した、前方に黑煙が見える、敵が市街に火を放つたのだらう、既にして敵はわが進擊の前に、火を放つて逃走を企てたのだ。

而して上るに從つて、驚かせたのは、上流から丸木舟を操つて下る住民の群である、彼等は櫂を振る手を休めて、手を打振つてゐる。同時に兩岸の部落は、水邊に出揃つて、手を打振りながら奇聲をあげて、歡迎してゐるではないか、恐らく皇軍によつて救はれる喜びを絶叫してゐるのだらう、それが行く手右岸ばかりでなく、遠く左岸からもわめき聲が傳はつてくる、眼鏡で眺めると家といふ家に鈴なりとなつた住民、白旗を振り〳〵喊聲を上げてゐる、降伏の意味を表示してゐるのだ。黑煙は近づくにしたがひ、その相貌を現はした、敵が石油タンクに火を投じたのだ、水面には、油のギラ〳〵が火柱と共に流れてゐる、物凄い黑煙は益々激しく中天高く尾を引いてゐる。やがてかすかに市街が望見されだした、いよ〳〵ポンチヤナツクに到着したのである。

然し、敵は一發も撃つて來ない、舟艇は魚雷を警戒しながら進む、この時既に敵は都市を放棄してゐたのだ。而して意外にも、岸壁に出迎へたのは、陸路より一足早く入城した友軍であつた、兩岸の石油倉庫と思はれる二棟は、四ケ所のゴム工場と共に今なほ紅蓮の焰を上げてゐた。散亂した石油罐、燒け崩れた家屋、その中に唯一つ淋しく主なきスカールが、水邊に置き捨てられてゐた、市街の大部は慘禍から免れ、ポンチヤナツク市は我が軍の無血上陸に依つて完全に我が手中に治められた。

10　カビエング敵前上陸

濠洲委統カビエング敵前上陸の大壯途は、大船團を整へ堂々南半球目指して進む、南國の空は澄み渡り、風もなく毎日天候に惠まれた、敵前上陸の大壯擧に上つてゐるとは思へないほど航海は愉快である。

敵前上陸の前日である。「わが海鷲はニューギニヤ一帶の敵空軍根據地を爆擊、一機も殘さず敵機を撃墜破した」といふ快報が入る、敵機の心配はないぞと躍り上つて喜ぶ。いよ〳〵赤道直下だ、全員武裝して甲板上に集合、田中部隊長より「今赤道を越えて南半球へ進擊するに當り皇居を遙拜せんとす」と嚴肅な訓示がある。遙か北方に向つて捧げ銃を行つた。

暑熱はいよ〳〵增してゆく、涼しい甲板上で卅一度、太陽はギラ〳〵と輝き、直射されると

灼けるやうだ、やがて夕闇が迫る、早めに夕食をとり、敵前上陸前の一時を眠つたらおい〳〵と叩き起された、直ぐ甲板に上つて見ると、カビエングと思ふ邊りが炎々と燃え夜空はまるで夕燒けのやうに眞赤である。

刻々時刻は迫る。廿三日午前〇時遂に進擊命令が下つた、繩梯子を傳はつて舟艇に降りる、風はないがうねりは大きい、燃える火と星明りで稍明るい、海面を輕いエンジンの響きを立てて進んで行く、間もなく狹い水道の入口だ。目指す埠頭が近づく、燃える火を映じて、舟艇はすつかり敵に暴露してゐる。

「今擊たれたらそれこそ一たまりもない」

と氣が氣でない。敵はまだ氣がつかぬのか、それとも引きつけてから擊つ積りか、恐ろしいほど無氣味な一瞬だ。

「着岸ッ」

それッと一齊に海へ飛込む、無我夢中で砂地に伏せる、上陸成功の信號彈が闇空に上つた。

心配したゞけ損である。敵は一發も擊つて來なかつた。カビエングの街はジャングルの中に浮び上つた公園のやうだ、全島は珊瑚礁で白い波うちぎはからすぐに椰子でふち取られ榕樹、ラワシ、カオールの密林でくろ〳〵ともり上つてゐる、綠の芝生の丘、赤いトタン屋根の家が點々と散る、市街が椰子林を越して見えかくれしてゐる、後から〳〵と舟艇が着岸する、波うちぎはまで茂つた椰子林の間に敵機銃陣があつた、壕は立派に造つてあるが敵は一人もゐない。棧橋の火焰の蔭から友軍が勇躍上陸する姿が見える、白い鋪裝の二間道路の榕樹の並木が續き、佛桑花の赤い花が咲き亂れ、街は次ぎ〳〵に目に映る、遙かの飛行場の方向で黑煙が入道雲のやうに絶え間なくたちのぼる、飛行場倉庫への的確なる友軍機の命中彈と敵が逃亡に際して飛行場のドラム罐に放火した火焰である、重慶側の黨部に見事な命中彈……靑天白日旗が建物もろともフツ飛んでゐる、棧橋に命中彈……敵コブラの倉庫が燃え續けてゐる、しかも民家には一彈の被害をも與へてゐなかつた。

11　シンガポール敵前上陸

大東亞建設の大基地、英國が東亞侵略百年の策源地たる、シンガポール要塞、敵前上陸は、其の背面たるジョホール水道からであるとは言へ、其の至難なるは申すまでもない。

ジョホール水道の渡過作戰は　支那、南洋の敵前上陸と異り、上陸正面は狹く限定され、香港島の敵前上陸と同じやうに、甚だ不利であつた。一キロ乃至二キロのジョホール水道の對岸は、凡て敵の堅陣であり、敵の銃砲火である。從つてこの作戰は渡過戰であると同時に要塞戰の本質を備へてゐたのである。

この困難なる作戰を敢行するには、先づ水も洩さぬ準備が必要である。一月卅一日夕ジョホール・バル一帶の地に進出したわが作戰軍は、極秘裡に水道突破の準備を始めた、渡過作戰には奇襲渡過と强襲渡過の二方式があるが、シンガポール敵前上陸は强襲戰法が採られた。まづわが軍は優勢な航空部隊をジョホール・バル附近に進め、戰爆の大編隊をもつて、シンガポール島の敵軍事施設と要塞防備の中核をなす要塞及びトーチカに對し、晝夜を兼ね間斷なき猛爆擊を行ひ、敵抵抗の中核破碎に努めた、之れは卽ち掩護射擊の一つで、上海と同じである。

續いて二月四日以來ジョホール・バル北側地帶に布陣した、有力な重砲兵は主としてマンダイ、テイマー地區の敵抵抗中樞陣地に猛擊に次ぐ猛砲擊を加へ、その凄烈なる砲擊はシンガポール全島を震撼し、實に五日間も續けられた。かうして航空部隊の猛爆擊と重砲兵の猛砲擊とによつて、流石に强靱なシンガポール島要塞の抵抗據點は、非常な大損害を受けたのである、この間にわが渡過準備は着々として進められた。

ジョホール水道の敵前强襲渡過は九日午前零時と決定された、定めの時刻至るや、やが決死の部隊は一齊に舟艇渡過を開始したのである、既に、敵軍はわが猛爆擊と猛砲擊に損傷し、殆ど手も足も出ぬ狀態に陷つてゐた、わが軍はこの間隙を巧みに捉へ、强襲渡過を開始した。第一回、第二回は幸にも殆ど無疵で上陸に成功した、第三回に至るや敵も漸く氣づいて、猛擊を加へて來たのである、然しこの時は大體有力部隊は上陸後である、敵は殆ど施すべき手段を失つた。斯くして九日未明までに、わが主力部隊は一齊に對岸に確固たる地歩を占めたのであつた。

巧みなる作戰　世界戰史に未曾有なる敵前渡過作戰は、實に巧妙なわが陽動作戰が採られた、この陽動作戰とは、敵をあざむく作戰で、古來戰爭にはしば〳〵行はれた。卽ち上陸決行の八日午後先づわが左翼〇〇部隊は、一齊に砲門を開いてジョホール陸橋東方セレター海軍根據地附近一帶に向つて猛攻を加へた、この砲擊に敵軍は常に敵陣地の眞正面から突擊する日本軍の勇猛果敢な戰術から推して、わが攻擊目標は明らかに、セレター海軍根據地に向けられてゐると信じた、間もなくこの左翼〇〇部隊の一部は、敢然敵前渡過してウビン島に上陸した、敵はいよ〳〵この觀察を決定的とし、急ぎ防禦の主力をこの方面に轉じ、必死の抵抗を試みようとした、隙やよしとわが右翼〇〇隊及び〇〇部隊が、左翼部隊に劣らぬ猛攻を開始し、前面敵陣地に果敢な制壓を加へつゝ、飛燕の如く敵前渡過を開始し、僅か廿分の驚異的スピードにて、水道を一氣に乘切り、上陸したのであつた。

第四節　敵前上陸美談

1　輸送船の奮戰

敵前上陸に、輸送船の重要なる事は、屢述の通りである、輸送船は、敵陣近く任務を果さねばならぬ爲に、いざと言ふ場合は、熾烈極まる敵十字火の眞つ只中に、奮戰する樣は、戰艦にも劣らぬものがある。上海沖で一萬五千トンの敵國船プレジデント・ハリソン號を追跡拿捕した長崎丸の殊勳を初め、大東亞戰爭以來、心膽を寒からしむる、輸送船の奮鬪は、數限りないが、其の中の二三を述べ、其の悲壯、勇邁なる一端を知るよすがとする。

……

比島上陸戰は、其の實戰を前節に掲げたのであるが、玆に輸送船の壯烈なる、奮鬪振りを特記しよう。〇〇丸の船長〇〇〇〇氏は〇艦の海軍護衞の下に、〇〇の船團によつて、〇日比島

ルソン島の某地に〇〇名將兵と器材を輸送した。暗闇の中で、

「用意完了！」

の合圖が擧ると、先づ〇〇〇〇大尉は、〇〇名を伴つて舟艇に乘移る、物凄い南洋のうねりを蹴つて進擊、瞬時にして上陸は成功した。續いて〇艇と〇艇、波濤を乘り越えて進んだ、この時敵は數機づつの編隊を組んで、數隊が〇〇丸上空に來襲して、狼狽しながら爆彈を投下した。同船の前後左右に物凄い水柱が上る、戰鬪機編隊からは、機關砲の掃射を浴びせて來た、わが〇艦から、掩護射擊の火蓋が切られ、壯烈な砲火が洋上に卷き起つた、船内にはまだ〇〇名の勇士が殘留してゐる。

「兵隊さんの上陸完了までは一人も負傷させてならぬ」

と〇〇船長は全員に叫んだ、今ぞわれ〳〵は海員の魂を發揮する時だ。彈雨の中に兵隊と船を死守するのだ！　敵機の襲來はいよ〳〵激しくなり、〇〇船長は臨機の處置をとつて拔錨、船位を變へると共に、乘組全員は兵隊を安全の域に誘致し、同船めがけて追ひすがる敵機を巧みに回頭避航を行ふ、負傷を物ともせず兵隊を守る船員の働きに兵隊一同涙を流した。すると敵の一彈は〇上にあつた、ガソリンのドラム罐を貫き、火焔を噴き上げた、二等運轉士〇〇〇〇氏は、もうこれまでと、傷ついた身を附近の浴槽に、衣服のままザンブと飛び込んだ、そして濡れ鼠となつて火の玉と燃え續けるドラム罐を、必死に抱いて海中へ投げ込んだ、危機一髪他のガソリンの爆發を防ぎ、〇〇名の兵隊さんと船を救ふことが出來た。

かくて乘組員は、彈雨の中を潛りながら、遂に全員の上陸を敢行したのであつた。上陸を終つて一時避難の命があつたが、同船は現場に踏み留り、敵のボーイング重爆擊機の襲來を受けつゝ、殘りの戰車、彈藥、砲、食糧などの荷役を强行した。間もなく友軍の飛行機が來援し制空權を確保され、敵機は沈默したが、この上陸作戰に船員の働きは筆舌に盡せぬものがあつた。又〇〇丸の船長〇〇〇〇〇氏は比島〇〇上陸作戰に當り、〇〇名の上陸を敢行し、敵の爆擊が猛烈を極め、一彈は同船〇上に落下し、浸水を始めたので、船長は敵彈の中に沈沒さしてなるものかと、錨を切斷して、〇〇南方の〇〇河口へ豪膽にも突進し、坐洲點へ向ひ刻々迫る危險

を、遂に切り拔けて、同船を安全にした。同船の周圍は敵の掃射彈で、物凄い水煙が立つ中に、勇敢に立ち働き、舟艇のほか、同船の全ボートを下して陸地との往復に、腕も折れよとばかり漕ぎ續け、兵員全部の上陸を全うしたのであつた。

……

又マレー半島敵前上陸に當り、不幸敵の魚雷が命中し、沈沒した○○艇は、沈着從容其の最善を盡した。即ち○○艇は、僚船○隻と共に馬來半島○○に着いた、部隊の上陸は案外すらすら行き祝盃を擧げ、皇軍の萬歲を唱へた。嬉しくて〳〵て戰友と手を握りあふばかりだつた、嚴肅な歡喜とでもいふのか、無事に部隊を送つて後始末をしてゐると、哨兵が飛んで來た、敵の潛水艦だといふ、ブリッヂから見ると、白い泡をぶく〳〵吐きながら魚雷が船に向つ來る、魚雷にお目にかゝるのは、生れてはじめて、想像したよりもスピードが遲い、これなら、たいしたことはないと、早速舵を一轉、ゆつくり魚雷をかはした、空しく泡をたてて、あてもなく走る魚雷は、まつたくユーモアだ、みんな思はず手をあげてはしやいだ。「さまみろ」と言ふ聲もあつた、ところがまた一發魚雷が走つて來た、こんどは舵を一轉したばかりで、どうにも動きのとれぬところだつたので、覺悟をきめた、隊員はみんな冷靜に落着き、指令通り部署についた、秒一秒近づくと魚雷は、氣持のいゝものではないが、しかし覺悟を決めてしまつた瞬間落着に落着いたので、別にどうとも感じなかつた。

鈍い不愉快な衝擊があつた、それは案外ゆるい當りだつた、敵ながら天晴れ、機關部に命中した、なにしろ機關をやられたので手のつけやうがない、附近にゐた僚船と連絡して、ゆつくり避難にかゝつた、發火したが、爆發力が少いので火の手はゆるく、船中燃えだしたのはその晩、沈んだのは、翌九日の夕方七時だつた、魚雷をうけてから沈むまで實に二十九時間三十分、ざつと三十時間、漫々的な魚雷だ、わが魚雷は機關部に命中したら最後、一瞬にして轟沈だ、他の箇所でもすぐ爆沈だ、思へば今時でもこのやうな手ぬるい魚雷があるものか、あれなら部隊を滿載してゐたとしても、一人のこらず救助できる、敵の魚雷は二十年も遲れてゐると、皆

んなで笑つた。

2　掃海艇の犠牲

蘭領ボルネオ、タラカン島の敵前上陸は、奇襲功を奏したが、掃海戰の活躍こそ、鬼神を哭かしめるものがあつた。

敵前上陸のその日〇〇隻の掃海艇は、上陸部隊の突擊路を拓くため、ひそかにタラカン灣深く進入した。眞に決死の掃海である。どす黑い海面には無數の機雷が不氣味に浮いてゐる。突然島の西南岸の敵砲臺が火を吐いた、死のやうな沈默が、一瞬にして物凄い彼我の砲聲にかき亂され、集中彈の中に艇は木の葉のやうにゆれる。だが艇の上には白鉢卷の勇士たちが、阿修羅の如く立働き、一瞬たりとも砲擊を止めない、上陸部隊が聲を呑む瞬間、掃海艇は艇尾に猛烈な敵彈をうけた、と艇は徐々に沈みかける、上陸待機の勇士たちは、齒を食ひしばつてぢーツと見守る、艇はなほも砲擊を止めぬ、艇はますます傾斜する、いよ〳〵沈沒だ、愈々最後だと思つた瞬間、また一彈が發射、敵陣に炸裂した、何たる沈着振りだらう、しかも艇首の砲塔にはなほ泰然と仁王立ちになつた砲手が見えた、つゞいてまた一發、彈丸は沈みゆく艇上の勇士の魂をこめて敵陣に轟然火を吐いた、と同時に、仁王立ちに、立ちはだかつてゐた砲手の姿が、チラリと動いた、それを最後に艇は從容として海中に姿を消した。

息を殺して進擊路の拓くのを待つてゐた勇士たちは、この大きな犠牲の前に肅然と頭を垂れた。だが勇氣百倍タラカン敵前上陸に成功したのであつた。

3　コタバル敵前上陸の華

コタバル敵前上陸の悲愴は、前節記載したる所であるが、其の中にも、肉彈勇士、インテリー勇士の壯烈さは、確に美談に價する。特に之に記して敬意を表するのである。

愈々船は岸へついた。岸邊の情景が一段と愴絶を加へた、頑强に抵抗する敵の大型トーチカが、砲火を吐いて、波うち際のわが兵士を掃射する。突如！

「よし俺がやる」

〇〇部隊の中から飛出した一人の兵士があつた、砂を蹴つて狂走、聲一杯萬歳をわめきつゝ

トーチカの銃眼にガバとばかり抱きついた、なんといふ壯烈、身をもつてトーチカの蓋をしたのだ。

「それッ」

瞬間にトーチカの側面へ廻つた勇士らは手榴彈をなげた、トーチカの中には、暴虐なイギリス兵に鍵をかけられ、入れられたまゝ、やむなく必死の防戰をしてゐた、六人の濠洲兵印度兵がゐた、かくて一ツのトーチカは破つた、噴水の如く突ッ込む勇士、その先頭に立つた〇〇部隊長、

「眞ッ先きに死ぬぞ、さあ續け」

と叫ぶ、續いて椰子の林の中に待ち構へる砲兵陣地に、手榴彈と日本刀をかざして斬込むだ、前面にある三ツの大きなクリークも何かあらう、救命具をつけたまゝ飛込んでは進んで行く、揚陸の直後のため大砲も機關銃もない、肉彈をもつて敵にぶつつかる勇士、最初のクリークの幅は約二町水煙が物凄くあがる中を阿修羅の如く進んだ。

次に〇〇隊は〇〇部隊の中で唯一つの東京部隊、インテリ許りの隊だけに、〇〇隊長は上陸前ひそかに案じてゐた。ところがこのインテリ部隊の勇猛さは驚く許りであつた。敵彈を受けて燃える〇〇丸上に全員たゞ高射砲の鬼となり、敵機を射ちに射つたその彈藥に火がついた、耳を聾する爆發の音が續く、船長が〇〇隊長のところへ來た。

「もうこの船は絶望である、早く舟艇で上陸して下さい」

といふのである、しかも船一杯敵彈と大火災とでクレーンも悉く壞はれ、高射砲も降ろすことが出來ない。

「俺はこの高射砲と一緒にこゝで死ぬ」

と〇〇隊長が言つた。すると傍にゐた若い將校、

「なにをいふのですか、われわれの高射砲は既に人事をつくした、今から一人の兵士として斬込みませう」

「隊長を逆に勵ます〇〇軍醫中尉の言葉に、」

「おゝ然うだ」と〇〇隊長初め突擊に移つた。

ことに凄愴なは、中央ブリツヂの上にゐた機關銃手、頰も焦げただれ「われ〳〵は今から斬り込む、みんなさらばだ、さあ天皇陛下萬歳を奉唱しよう」と突擊した。夜空を焦し燃え擴がる焰の船の上、聲限り叫ぶ萬歳の聲、背にはいづれも一本銃劍、しら〳〵と明け行く南の岸に、壯烈極まりなき激戰また激戰、空爆と敵彈の中を實に十二時間、一齊に椰子林を縫つてコタバル飛行場に、〇〇部隊は一團の熱火となつて突ツ込んだのであつた。

4　運動選手一つは咲き一つは散る

今次の大戰に於て、日本男兒である以上、一旦戰線に立てば如何なる職務、如何なる階級の人々も、皇國の爲に華と散るべく、雄々しき奮鬪を見せてゐるが、中にも、香港の敵前上陸に於て、二水泳選手が、驚異的手柄を立て、又フイリツピン敵前上陸に於て、勇ましき最後を遂げた運動選手は共に敵前上陸の語り草である。

即ち一つは咲き、即ち一つは散つたのである。香港島要塞は其の周圍蟻も通さぬ機雷原がはり廻らされ、普通の舟艇では、機雷原突破は大危險、敵前上陸は困難とされてゐた。また掃海上の、海軍の艦艇さへあぶなく、侵入することは容易でなかつた。そこで、どうすればこの機雷原を突破し得るか、軍でも困り果てた末、遂に案出されたのが奇想天外な「はだか突擊隊」である。

之の「はだか部隊」即ち游泳隊は、眞裸に銃を背負つて九龍側の鯉魚門と香港島側の白光燈臺との間を流れる幅一キロ流速一メートルの鯉魚門水道に飛びこみ機雷網をくぐつて、敵陣を奇襲「はだか」でトーチカを分捕る、また他の役目は機雷の網をたち切つて、海上に舟艇の突擊路をきり開く決死的作業だ、眞に日本人の攻擊精神なくては、出來ない戰術である、この卓拔な計畫をたてた攻擊部隊長は、數箇月前から、各部隊の腕自慢の河童兵を集めて、數個中隊の游泳隊を編成、二人の教官の指導で三箇月間、秘かに血を吐くやうな泳ぎの猛訓練をつみ、香港攻擊の火蓋を切る頃には急流を乘り切る必泳の腕前と自信が出來あがつてゐた。

必勝の「はだか突擊隊」を鍛へあげた教官二人組こそ揃ひも揃つて「水泳王國」靜岡縣が生

んだ平泳界の闘將學生時代に「水泳日本」のため、萬丈の氣焰を吐いた小池禮三君（慶大出身二十七歳、羅府オリンピツク二着、ベルリンオリンピツク三着）と伊藤三郎君（明大出身、二十七歳、ベルリンオリンピツク五着）であつた、スポーツで鍛へた精神力と、體力技術を戰場に活用、卓拔な游泳戰法の準備訓練を、見事になし遂げたのである。

又、別章記述の如く、フイリツピン、ラモン灣の敵前上陸に於て、悲壯なる最後を遂げた、棒高跳の選手、大江季雄少尉は、且つてはベルリンの青空高く、感激の日章旗を揭げたのであるが、其の最後は餘りにも劇的であつた、同少尉は渡邊涉中尉（鹿兒島縣薩摩郡高江村）片岡英夫中尉（大分縣北海部郡下北津留村）以下〇〇名の勇士とともに、舟艇に移つた、波は靜か上陸地點の椰子林が、魔の靜寂のやうに眠つてゐる。と、突然敵の機關銃集中だ「うぬッ」と、闇の彼方に光る、機銃の火をにらんで動かない武裝勇士たち、機銃掃射はいよ〳〵猛烈である。舟艇の中で渡邊中尉が叫んだ「大江少尉はどうした」戰友を氣づかふ聲が、彈のスコールのなかに消え返事がない、舟艇の前部で「天皇陛下萬歳」の聲が二回聽かれた、大江少尉らが上陸地點に達したとき、同少尉は腹部に銃彈をうけ軍刀をしつかと握りしめてゐた、さつきの彈のスコールに倒れたのだ、息づまるやうな〇分の後、舟艇は遂に數百發の彈痕を受け〇〇船に引きかへした。舟艇は負傷者搭載のまゝ船上に上げられた、大江少尉はたゞちに救急手當室に運ばれた、眞一文字に結んだ口「無念だ〳〵……」と天井をにらんでつぶやく、〇〇船の宮永三治兵長、中江好春上等兵が血浸む軍衣をぬがせた、驅付けた藤本中尉が强心劑の注射器をもつて叫んだ「誰か大江軍醫を呼べ」大江泰臣中尉は季雄少尉の兄だ、僅かの間を見つけて驅け着けた兄中尉は、無言で鮮血に染る弟に頰を寄せた「慥りするんだ！　これ位の傷でなんだ」と左手を摑んだが、甚だしい出血はどうする事も出來ない。「藤本中尉、弟はとても助からぬ、駄目だ、他の負傷者を賴む」血を分けた弟の最後の瞬間、兄軍醫中尉は決然と藤本中尉の手から注射器を取上げた、藤本中尉は大江兄弟の心を思ひ、他の戰傷者のために救急室を出た。兄中尉は、

「弟、あの勇ましい音を聽け！　あの轟々たる音は皇軍の前進だ」今は聽覺から遠ざかつた弟

にさゝやく、すると少尉は最後の氣力を張つて起き直り「天皇陛下萬……」と叫んだ。少尉のあとをついで兄中尉は「萬歳」と叫び足した。季雄少尉は莞爾と口邊をほころばして從容死についたのであつた。

5　シンガポールと雪洞の力

世界注視の的、シンガポールの、迅速果敢なる敵前上陸に於て、大病中大責任を果したる一個の雪洞が、如何に大なる役割をなし遂げたるか、美談中の美談である。

二月八日夜十時頃皇軍がシンガポール島の敵前上陸を敢行しようとする寸前である、兵が押し止めるのも、聽き入れぬ〇〇中尉は、〇〇の渡過點へ駈けつけ、組上げられたばかりの鐵舟へよろめき乍ら數名の兵に支へられ乘り込んだ、シンガポール島上陸地點の地形、機雷の有無の發見、障碍物の除去などを眞先きにやり遂げ、突進しようとする歩兵部隊のため標識燈を掲げるのがその任務であつた。

闇を縫つて鐵舟は、長い間上陸豫定地を物色した、逸早く發見した敵は擊つて來た、中尉は悠揚迫らず障碍物や濕地帶の少い〇〇を上陸地點と決めた、そして鐵舟から飛び降りるや、腰までつかる泥濘に足を奪はれながら、大熱の身に鞭うつて島に這上り灌木や羊齒で蔽はれた、岸邊に雪洞の灯を點じた、仄かな灯ではあるが決死の皇軍には、大切な導きの灯である、〇〇中尉は安堵したものか鐵舟へ戻るなりドツと倒れてしまつた。〇〇中尉は、數日前からマラリヤで、高熱中、病床の中で大責任の囈言ばかり言つてゐたのであつた。

熱のため意識溷濁せんとする病床で、中尉は「完全上陸成功」の報を聞いて滿足さうに微笑んだ。

第四章　敵前上陸と南洋地方

大東亞戰爭勃發以來、皇軍の急速果敢なる敵前上陸は、全世界を震憾せしめたが、之れ等南洋地方は、邦人に取り廣袤連遙の地方にて、物めづらしき風土人情あり、依つて上陸地方を中心として、其等方面の概要を記して參考に資す事とした。

1　馬來半島

我が軍が、大東亞戰爭劈頭に於て、一方布哇を奇襲し、一方馬來半島に、敵前上陸を敢行したのは、如何に馬來半島が、重要なる地點であるかを證明するものである。

馬來半島は、ジヤングル戰である。千古斧鉞を入れぬ大密林の、晝なほ暗き谷間を伐り開いて、猛獸と毒蛇の脅威を物ともせず、敵を追つて進擊する皇軍、ジヤングル戰は苦勞が多いかはりに、敵の側背を奇襲して、アツといふ間に勝敗を決するためには、必要缺くべからざる戰

術である。皇軍のジヤングル部隊の先登にはまづ、方向偵察のための斥候が出る、續いて鋸、斧、鉈、鉞などを携行した伐採班が、斥候の示す方向に向つて大木を倒し、柴や毒草を薙ぎ拂ひながら進む、その次に道路補修班が續く、圓匙、十字鍬を持つて、どうにか通行出來る程度の道をつくる、さうして最後に本隊が前進する、その勞苦と危險は想像以上である。

猛獸は、ライオンや虎である。毒蛇は胴まはり、一メートルもある大蛇がゐる、谷間や沼には鰐もゐる、それにマラリヤ蚊と言ふ强敵がゐる。又山蛭もゐる。虎を喰ふ大蟻群もゐる。之等と戰ひつゝ、本物の敵を擊破するのだから、大變であつた。

其の代り、可愛いゝリスや愛嬌ものゝ猿もゐて、思はぬ慰安を與へて呉れる。それに罐詰ならぬほんものゝパイナツプルは勿論果物の王ドリヤン、女王マンゴスチンなど熱帶果實が熟してゐるのを叩き落す愉快もある。木に攀ぢるもの、落ちたのを拾ふもの、ライオンもその木の下で實を奪ひ合つて喧嘩するといふ、果物の王ドリヤンが大きな音を立てゝ高い樹上から落ちてくる。

又、馬來半島は、有名な錫とゴムの產地である。一意强敵を追擊する勇士達には、直接錫は用はないが、ゴムは直ちに實用に役立ち、眞に天の惠みである。

ゴムの地帶に入ると、行けども〳〵ゴムまたゴムである。ゴムの林、ゴムの森、ゴムの突擊路、これが大切な東亞の資源である許りではない、自轉車部隊はパンク直しに早速機轉の手腕を利用する、手近のゴムの木にちよつとナイフで疵をつければ、ほとばしる白いゴム液、それをチユーブの破れに、なすりつけ立派にタイヤの修繕が出來上がる。「陽が暮れないうちに俺のもやつてくれ」と戰友に賴まれ卽製自轉車屋も出來る。やがて夕陽がジヤングルの彼方に落ちる頃、凉風とともに螢の群がゴム林に流れ出す、まるで豆ランプが飛ひ交ふのかと思はれる、大粒の光りが、フワリ〳〵と兵隊さんの肩に、とまりながら流れをかすめていく、インデアンの頭のやうに椰子の葉で擬裝したトラックの葉にも鈴なりにとまる、兵隊さんの夢は七夕の思ひ出でか、すつかり馴れ切つた猿は眠りにつく兵隊さんの肩のあたりに、チヨコなんと丸まつてお先に白河夜船をきめこむ風景もある。

又同じジヤングルでも、山のジヤングルはまだよいが、谷や澤のジヤングルは大變である。底無し沼で竿を突込むと二間ぐらゐ、ズブズブと埋まる、かうしたところを浮いてゐる草の上なぞ、薄氷を踏む思ひで進むのである。

「日本兵は鰐のゐるパハン河を鰐と一緒に泳いだ」

と宣傳した人もあるが、東海岸では舟艇が鰐の背に乘りあげ、螢かと思つて近づいて見たら鰐の目玉だつた話もある。またテメルロー附近中央縱貫山脈では、人食人種といはれるサカイ族が皇軍歡迎に現はれた。その女房連が兵隊さんの汗ばんだ膚を拭いてくれたが、この密林美人のサービスはあまりいゝ氣持はしなかつたと言ふ事である。

2　フイリツピンルソン島風景

皇軍が敵前上陸した、ルソン島は、我が國の臺灣に最も近い。ルソン島の最北端にある、アパリの漁港では晴れた日に港外の島に立つて仰げば、臺灣の南端が望見出來る。この漁港を中心に、海濱一帶は日本人と比島人の混血兒が多い、臺灣、沖繩あたりの漁船がこの邊に漂流し比島人と混血したのである。

バギオはルソンの輕井澤である。マニラの紳士は暑熱をこゝに避ける、三ツ葉の松樹に取り圍まれ赤い屋根のホテルと別莊が散見する、松の少い比島では日本人はこの地に來て遙か望鄕の念を抱く、標高五千尺、下界のマニラでは炎熱百度を超えるときも、この地のホテルではペーチカを焚いて暖をとるのである。

リンガエンは、椰子樹が亭々と聳える白砂青松の海岸である、椰子の葉蔭に南洋美人ならぬ、椰子の葉つぱにカムフラージュされた野砲が海面を睨んでゐた。こゝからはパンパンガの平原を横切る坦々たる幾筋かの道路がマニラに通じてゐる。

レガスピーは太平洋岸卽ち南方東岸唯一の開港場、灣頭に立てば富士の姿に似た活火山マヨンを望む、この國でも二等邊三角形の山は名山と稱し、比島銀行券廿ペソ紙幣を飾つてゐる、わが國で「猪一」といふが如く、この國ではマヨンは廿ペソを意味するのも面白い。

カビテは米國東亞艦隊の根據地であつた、太平洋横斷クリツパー機の發着場である、大なる

無電塔數柱、天に聳え、この町の海岸はマニラ灣特有の美しい夕燒望見の名所である、リカルテ將軍と共に、獨立戰爭の大立物、アギナルド將軍の出生地であり現存地である。

マニラは東洋の眞珠といはれ埠頭近くにネタの公園、プールバールの海邊がある。熱帶下の都會にふさはしく白堊の建築物が多い、盛夏のころにネタ全園を飾るフアイヤ・ツリーの眞紅の花は最も印象が深い。

比島人は色は黑いが却々の洒落者である。ことに女は甚だしく奇拔な服裝をしたがる、長いスペイン時代から洋裝をし混血兒であることを一種の誇りに感じてゐる。

人種はタガログ人種、ビサヤ人種、モロー人種が多く他はスペイン人、アメリカ人に次いで支那人、邦人、印度人、泰人、佛人、マレー人である、惡くアメリカニズムに染まり女尊男卑も甚だしく、ハンカチーフを落した場合は絕對に女が拾はず、男の拾ふのを待つてゐる、バスの中では若い女が乘ると男が四、五人立ち上つて我先に席を讓る。

名物は競馬と月に一回乃至二月に一回位行はれる市內行進卽ちオンパレード、これは內地の山車の樣なものを綺麗に裝飾して、アメリカかぶれの女を乘せて市內をお祭騷ぎで行進する、これに大學生が參加する、學生達は軍事教練の分列行進を變形させ却々大したものである。一番盛大なのは二月のカーバル祭である。マニラの華僑は市街の一隅に支那街を形づけてゐる、面白いことには一面抗日を叫びながら日本商品を賣買してゐた。マニラの近郊に日本人同樣の容貌の人達の住む村がある、これこそ和寇、御朱印船活躍時代の物語を秘めてゐると思はる、アメリカ政權が布かれてから、彼等はこゝにある墓地を徹底的につぶしてしまつた、今でも時々掘り返すと、日本人名の書かれた石碑を發見することが出來る。

3　フイリツピン、ミンダナオ島

十二月二十日未明、我が陸海軍部隊が、敵前上陸に成功したる、ミンダナオ島は、比島獨立戰爭の大立物リカルテ將軍の出生地である、リカルテ將軍は、大東亞戰爭勃發するや、我が國の戰勝を祈り、日本軍が比島を攻略するや、矢も楯も堪らず橫濱の寓居を立ち老軀を提げ、懷しの比島に渡つた。そして四十年振りに、同志アギナルド將軍と握手した。リカルテ將軍は、

ドロボウ米國の、國旗の上つてゐる間は、比島の土を踏まぬと、日本に亡命してゐた、赤誠の大將軍である。ミンダナオ島はフイリツピン群島中最南部にある、面積はルソン島につぎ九萬五千平方キロ、北海道よりやゝ大きい。島内の總人口は百七十五萬、大東亞戰爭前比島政府はドイツを追はれたユダヤ人を、十年間一萬人移住させる計畫もしてゐた、しかしこの島こそフイリツピン中、わが國にとつて最も關係の深い土地である。同島首府ダヴアオ付近には在比同胞二萬四千名のうち一萬七千名が住み、その大部分がマニラ麻の栽培とその貿易に從つてゐる、マニラ麻がフイリツピン第二位の輸出品となつたのも邦人の活躍によつたものである、同島はこのほか金、鐵、石炭、海産物など、未調査の豐富な資源が見込まれ、大戰前大統領も二千萬ペソの大金を投じて開發計畫をたて、すでに自動車道路の延長は二千キロ近くに達してゐる、現在着手してゐるスリガオの鐵鑛は純分度は低いが有望である、それだけに米比兩軍當局では、この島だけでも軍用および商業兼用の飛行場としてダヴアオ、コタバト、ミサミス、マライバライ、カガヤン、プツアン、スリガオおよび新設飛行場としてサンボアンガの八ケ所がある。さらに開戰直前全比島を三防衛地區に分ち、その一つとしてミンダナオおよびヴイザカ地區管區が設定され、その司令部をセブ島のセブ市においた、この管區中で最も戰略的重要性を持つものはミンダナオ島である。

ダヴアオ開拓移民の先陣は明治卅七年秋、太田興業株式會社々長故太田恭三郎氏に引率された日本人千餘名、之は、ルソン島マニラ、バギオ間のベンゲツト道路工事に、惡疫と闘ひ、三百餘名の犧牲者を出し、比島人が匙を投げてゐた、その工事を完成した喜びも束の間、無法な比島當局のお拂ひ箱に會つて、新しい開拓地を求めてきた人達であつた。

その後四十年麻の栽培、椰子園の開拓等、生活の安定を得た邦人は前世界大戰の、マニラ麻好況に惠まれ、急速に增加し、戰前ダヴアオ州に一萬九千名、ダヴアオだけでも一萬六千名におよび、傳統のマニラ麻栽培に、邦人會社四十一社、私有地約五千町歩、拂下地五千町歩その他栽培面積は二萬五千町歩、實にマニラ麻全産類の二割餘十八萬俵を占めてゐた、このほか日、比合辨の漁業會社で、約百名の漁夫が水産日本の逞ましい腕を振ひ、租借地三千二百町歩の椰

子園では、邦人四會社がコプラ製造に、また森林業關係では年産卅五萬石の木材産出に邦人が活躍し、邦人投資額は總計四千五百卅萬ペソに及び、ダヴアオ産業の中核を握つてゐる　全くダヴアオに行くと日本に歸つたやうな氣がする、ただ暑いだけが困るが、街全體の經濟が日本人の力によるため、土民も多くは日本語を語り、醬油工場や味噌工場もあり、たくあんも漬けて食べる、お寺もあり日本字新聞もあるといふ具合、ダヴアオ州内の地名でも日本人が名づけたまゝが公認されてゐるのが多い。

之れだけ日本化するには、太田氏以下の粒々辛苦のうちに、マニラ麻を栽培したのに初じまるもので、同地の邦人はもとよりフイリツピン人も太田氏らの業績を德とし、ダヴアオ市外のミンタルの一丘上に「ダヴアオの將來の發展を信じこのために貢獻した太田恭三郎」と刻んだ記念碑まで建てられてゐる。

日本人小學校や病院も完備し、ミンダナオ島そのものが外國の領土とは思へないほど、密接にわが國と結びついてゐる、またこの島は回教徒モロ族が多く、キリスト教徒である比島支配民族にたいし、慓悍をもつて鳴る彼らは、しば〳〵反抗を試み、一時は殆ど獨立を維持してゐたこともあり、フイリツピン政府も、苦手の島とし取扱はれてきた。

日中は平均華氏八、九十度、夜は六十度ぐらゐに下るから、服裝は夏服一式で萬事間に合ふ、紳士でもネクタイやカラーをつけないで輕裝してゐる。

寢具は毛布が一枚あればこと足りるが、たゞ年中蚊だけは困る、マラリア豫防のため蚊帳は是非必要である。

食事は米が主食で、味噌醬油と日本の食事そつくりで、冷しうどんは土人の愛好食になつてゐる、果物はパパイヤ、バナナ等手あたり次第で、邦人中獨身者は頼母子講を作つて、内地からいゝお嫁さんを迎へる準備をし、誰れもが墓場だといふ固い決心で働いてゐる。

4　英領ボルネオ

我が軍が、三方面重要地點に一擧敵前上陸を敢行した、英領ボルネオは、石油とゴムの寶庫であり、英國東洋侵略の據點でもあつた。即ちフイリツピンとシンガポールの中間に位し、英

國東洋艦隊に必要なる石油は、此所から供給してゐた。それ程英國に取りて、重要なる地域であつた。

この英領ボルネオを、日ビ人は一般に英領北ボルネオと呼んでゐるが、實際は英領北ボルネオとサラワク王國とブルナイ土侯國（ブルネイともいふ）の三つの部分にわかれてゐる。ひとしく英國勢力下にあつても、その統治形態と民情を多少異にしてゐる、けれども、イギリス人總督は、これが政治、經濟、軍事の一さいの權力を握つてゐた、イギリス人は他の二國を入れて二百名足らずで、そのうちこの總督府のあるサンダカンに六、七十人ゐる、日本人はほとんどこの北ボルネオに住し二千人くらゐ、タワオ付近にゐる。タワオ農園（三菱系）、ボルネオ水産などの邦人會社がゴム、椰子、麻の栽培、水産業等に從事し、最近引揚げた者わづかに百廿名くらゐだから、なほ千八百人以上の同胞がタワオ付近に殘つてゐるわけだ。華僑は六、七萬と推定され、主として雜貨販賣を一手に握つてゐる。

土人はマレー人種の一種のズスム族で英領北ボルネオの全人口廿七萬のうち、約、廿六萬くらゐをしめてゐる、島内では自治能力なく、イギリスの統治に心服はしてゐないが、さりとてこれに反抗するだけの氣力もない、赤道に近いのに海の關係で氣候は年中七十度から八十度を上下し日本人にも住みよい。

つぎにサラワク王國は、英領北ボルネオの反對の西側を占めて、ブルクといふイギリス人が王樣（土語でラジャーといふ）になつてゐる、このブルクの祖父が土人を煽動し、こゝに、イギリス軍隊を上陸させ、ブルナイ土人王國を蠶食して建設した國である、こゝの土人はジャバ、マレー種に屬し、頭がよく自治能力をもつてゐる、全人口四十二萬のうち、華僑約十萬を除いた殘りの卅萬餘がこの土人で、日本に積極的な好意を寄せてゐる、また華僑には百萬長者も數人は數へられ、資産家が多いが、現實主義であり他の方面の華僑のやうに、日本に對してさほど惡感情をもつてゐない　最後のブルナイ土侯國は土人の王樣（サルタン）によつて統治される獨立國だが、シンガポールにゐたイギリス總督の監督下にあつた保護國で、政廳にはイギリス顧問が入つてゐた、心中うつぼつたる反英思想をもち、イギリス人の監督が政廳に出勤する